
蒼いラビリンス 【藍Side】

水樹ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼いラビリンス 【藍Side】

【Nコード】

N2813B

【作者名】

水樹ゆう

【あらすじ】

藍^{あい}は一人、冬の朝の「港の見えるヶ丘公園」に佇んでいた。行く当てもなく頼る人間は誰もいない。心細さに凍える藍がそこで出会ったのは、「芝崎^{しばさき}拓郎^{たくろう}」と名乗るカメラマンの青年だった。【現代SF・ラブストーリー】 大幅加筆改訂版『蒼いラビリンス』眠り姫に優しいキスを『執筆に伴い、ただ今大幅修正中です。お見苦しい点があるかもしれませんが、ご容赦下さいませ。

第0話 【プロローグ】（前書き）

これは「蒼いラビリンス」の藍^{あい}視点の物語です。
一人称と恋愛小説修行のため、書いてみたいと思います。
最後までお付き合い下さると嬉しいです。

携帯でも読み易いように、改行・行間を多めに取っています。P
Cでは間延びした印象になってしまふと思いますが、ご容赦下さい。
> (_ _) <

第0話 【プロローグ】

何処へ、行けばいいの？

何を、信じればいいの？

父と、母と、慕った人。

そして、姉だと信じていた人……。

私の世界のすべてだった物は

あの瞬間に、すべて崩れ去った。

もう、この世界の何処にも、自分の居るべき場所はなかった……。

第1話 【出会い】

「これから、どうしよう……」

十一月。

それもまだ夜も明けきらない早朝。

あまりの寒さに私は、少しでも体温を奪われまいと、自分の腕で自分をギュッと抱きしめた。

ここは、たぶん「神奈川県」だと思う。

「港の見えるヶ丘公園」って言う看板があつたから、そう言う名前の公園なのだろう。

名前の通り小高い丘にある公園で、眼下には、日の出前のまだ薄紫に霞む港の風景が広がっていた。

さすがに、人影はない。

——美しい風景……、なんだと思う。

でも、私の心の中は、これからどうすればいいのかわからない不安と恐怖でいっぱい、そんなことを感じている余裕なんかなかった。

どうやってここまでたどり着いたか、自分でももう良く覚えていない。

何度かタクシーと電車を乗り継いで、と言うのを繰り返しているうちに、偶然ここに行き当たった。

——手持ちのお金は、ほとんど無くなった。

「これまで調べられることはまず無いだろうけど、しばらくは使わない方がいい」

そう言って、別れ際渡されたキャッシュカードがあっただけど、それを使おうと言う気持ちにはなれなかった。

『かしわぎいっすけ
柏木浩介』

そこに刻印されている名前を見ただけで、たぶん私は泣き出してしまっだろう。

それが分かっていたから……。

あんなに憧れた「外の世界」。

そこにあっただのは、自由なんかじゃなかった。

「どうして、私はお姉ちゃんのように、お祖父ちゃまが、会いに来てくれないの？」

「どうして、私だけ、お外にお出かけしちゃいけないの？」

幼い頃、よくそう駄々をこねては、柏木先生や、世話係の前田さんを困らせたっけ。

「藍のお父さんは、柏木先生。お母さんは、前田さん。そしておまけに、お姉ちゃんまでいるだろう？ それじゃ、いやかい？」

柏木先生の言葉が、まるでさざ波のように寄せては返す。

「帰りたい……。先生。私、帰りたいよ」

あのまま、何も知らずに生きて行けたら、どんなに良かっただろう。

鼻の奥に、ツンと熱いものがこみ上げる。

考えても、考えても、まるで迷路のように巡る思いに、もうどうすることも出来ず、私はただ自分を搔抱き、暗い港の風景を見つめていた。

いつそ、このまま、石にでもなってしまいたい。

そうすれば、何も感じずにすむのに――。

フツと、暗かった海に朝日が差し込む。

カシャ、カシャカシャ。カシャ、カシャカシャ。

——えっ？ 何？

聞き慣れない連続音がして、私は振り返った。

「あっ、すみません！ 勝手に撮ってしまっで！」

重そうなカメラを抱えた若い男の人が、ペコリと頭を下げながら走り寄って来た。

私より、頭一つ分は背の高い痩せぎすのひよろつとした風貌で、優しいな雰囲気を持った人――。

『TV子供番組のお兄さん』みたいだなと思った。
童顔だからだろうか？

「俺、私は、こう言う者で……あれ？」

胸ポケットやらジーンズのポケットやらをごそごそやっていたその人は、やがて何か合点が行ったと言うように、自分の手をポン、と打ち付けた。

「あつ、そうか、今日は仕事じゃなかったっけ」

呟くと、まるで少年のような屈託無い笑顔を見せて、

「俺、^{しばさきたくろう}芝崎拓郎しばさきたくろうって言います。フリーのカメラマンをしているんですが。突然ですが、モデルになつて貰えませんか!？」

とつさのことに反応出来ず金縛り状態の私に「お願いします!」と、勢いよく90度に頭を下げた。

第2話 【風景写真】

「是非撮らせて下さい。宜しく願いします！」

その言葉に、私は即答した。

「ごめんなさい。私、出来ません！」

はつきり言つて、そんな事をしている精神的余裕は無かった。それに目立ってしまったては、追っ手に見つかるリスクが多くなるだけだ。

ペコリと頭を下げ、きびすを返して逃げ出そうとしたその手を、掴まれた。

掴まれた右手首に電流が走る。

突然の事に驚いて、身体が固まってしまふ。

どうして良いのか分からずに顔を上げると、何故か驚いている彼の表情が目に入った。

数瞬の視線の交錯。

「あつ！ ご、ごめん！」

芝崎と名乗ったその人は我に返ったように、反射的に掴んでしまったらしい手を慌てて放した。

「それじゃ、話だけでも聞いて貰えませんか？ 確か、すぐそこにファミレスがあった筈だから……。お願いします。この通り！」

そう言つて、又、頭を下げる。

どうしよう……。悪い人には見えないけど……。

「お願いします！」

話を聞くまでは開放して貰えそうになかった。私自身が寒さに凍えた体を暖めたかったのもある。

話を聞くだけなら、大丈夫よね？

「分かりました。お話を聞きます……。でも、モデルは出来ません。それでもいいのなら……」

「ありがとう！」

彼はそう言つて満面の笑みを浮かべた。

公園から歩いて2、3分の所に彼の言った『ファミレス』はあった。

こう言つてお店に入るのは初めてだから、何だかドキドキした。

まだ早朝だからか、24時間営業の店内には私たちの他にはお客

は居ない。

低いゆったりとしたBGMが流れている。

暖かい――。

暖房の利いた店内はありがたかった。

彼は店の入り口近く、窓際の四人掛けのテーブルに「ここにしようか」と私に座るように促すと、自分も向かい側にニコニコしながら座る。

すぐに注文を取りに来たウェイトレスさんに二人分のコーヒーを頼み、おもむろにテーブル上に写真を広げ始めた。

「こういつ写真を撮っているんだ」

ちょっと照れながら見せてくれたその写真に、思わず目が奪われる。

「うわぁ、綺麗……！」

お世辞じゃない。

その写真には、美しい、どこか懐かしい風景が映し出されていた。

道ばたの小さな野の花。

海に沈む夕陽。

薄紫に浮かぶ街の風景。

綺麗なだけの写真ではない、素朴で温かい、優しい風景。

その写真を撮った者の人間性を伺わせるような、そんな写真だった。

「これは、けっこう自分でも気に入ってるんだ」と彼が最後にテールの上に出したのは、他の写真よりも一回り大きなサイズ。パノラマと言っただろうか？

その写真の風景を見た瞬間、私の心の中で、何かが揺れた。

それは、一面の向日葵畑の風景――。

抜けるような夏の青空の下で咲き誇る、大輪の黄色い花の群。

いつも真っ直ぐ「凛」として太陽を見詰めている強い強い夏の花。

強くなりたい――そう思った。

この向日葵のように強くなりたい。自分の運命に、負けてしまわないように。

「それで、モデルの事なんだけど……」

遠慮がちに口を開いた彼の瞳を、私は、真っ直ぐ見詰めた。

「別に雑誌に載せようとか、そう言っただけじゃないんだ。見ての通り、俺は風景写真が専門なんだけど……。でも君を見た時、初めて人物

を撮りたいって思った。今、もし撮らなかつたら一生後悔するよう
な気がする……」

そこまで言つて、彼は少し言葉を切つて自分の言葉を否定するよ
うに、「うつん」と軽く頭を振った。

「いや、違うな。単に君が撮りたいんだ。変な意味じゃ無い。この
風景を撮りたかつたように、君の写真が撮りたいんだ」

真つ直ぐ私を見るその目に、嘘や偽りがあるようには思えなかつ
た。

断るべきだ、と分かっている。

でも、断つてしまいたくない自分も確かに存在した。

「一日だけでもいいのなら……、お引き受けします。でも、公の場
に写真が公表されるのは困ります。それだけ約束して下さい」

なぜ断れないのか、私自信にも良く分からなかった。

ただ、一生懸命なこの人の何か手助けがしたい、そう思ったのか
も知れない。

「ありがとう！」

緊張していた彼の顔が、こぼれ落ちそうな笑顔に変わる。

その笑顔を引き出したのが自分だと言うことが、なんだかとても
嬉しかった。

第3話 【不審尋問】

「じゃ、改めて自己紹介を。俺は、芝崎 拓郎。フリーのカメラマンをしています」

明るく自己紹介を始めた彼、芝崎さんが、「君は？」と言うように屈託のない笑顔を向けて来て、私は一瞬どうしようか迷った。

別に、名前を名乗ったって、大丈夫よね？

「私は……おおぬまあい大沼藍です」

結局、偽名を使うのもためらわれ、本名を名乗りペコリと頭を下げた。

「あ、俺、こう見えても、二十七なんです。良く学生に見られるけど。ほら、見ての通り童顔だから」

二十七！？ 私より十コも年上なの！？

思わず驚きが顔に出てしまう。

だって、せいぜい二十一、二歳くらいにしか見えない。

確かに、凄い童顔だ……。

私の表情を見た芝崎さんは、はははと、照れたように頭ををかい

何だか、面白い人。

童顔なだけじゃなく、子供みたいに屈託なく笑う。悩みなんて無
なさそうな彼の明るさが、ちよつと羨ましい。

「私は、十七歳です」

「へえ。高校生？ でも、今日は朝早くからあそこで何してたの？
観光には早すぎる時間だね」

何気ない問いに、私は自分の表情がすつと硬くなるのを感じた。

私は学校に通ったことは無いし、観光に来たのでもない。
だからと言って、もちろん本当のことは言えない。

何か答えなくちゃと、頭の中で色々なセリフがぐるぐる回る。

適当でいいじゃない。どうせ、今日一日の事なんだから……。

そう思ったけど。

「……高校生じゃないです。学校には行っていません」

——結局、嘘は付けなかった。

芝崎さんは、私の答えに少し「うーん」と考え込む仕草をしたけ
ど、すぐに元の明るい表情に戻った。

「あ、これ、俺の連絡先です」と、デイベックの中から名刺を取り

出すと、私の方に向けてテーブルに置く。

『フリー・フォトグラファー 芝崎拓郎』

そう黒いインクで印字されたシンプルな白い名詞をまじまじと見ていたら、申し訳なさそうな質問が耳に届いた。

「あの。連絡先を聞いてもいいかな？」

ドキリとした。まさか連絡先を聞かれるなんて予想していなかったから、内心慌てふためく。

何か、適当な連絡先……！

再び、頭の中で色々なセリフがぐるぐる回る。

「すみません……」

結局私は、それしか答えようがなくて、うつむいた。

嘘は、つきたくない。

「携帯の番号か、メルアドでもいいんだけど。後で出来た写真を送りたいしね」

そんなもの持ってないから、やっぱり同じ答えを繰り返すしかない。

「すみません……」と。

「そんなに言いたくないなら、無理には聞かないけど……」

「すみません……」

芸の無いオウムのように、同じ答えを返す私にあきれてしまったのだろうか？

芝崎さんの口から小さな溜息が漏れたのが聞こえて、「すみません」としか答えられない自分の不器用さが情けなくなった。

第4話 【出物腫れ物】

気まずい沈黙が二人の間に流れて、店内の静かなBGMがやけに大きく耳に響く。

私は、膝の上でぎゅっと握った自分の手の甲に視線を落としながら、「やっぱり、公園で断ってしまえば良かった」と、後悔し始めていた。

そもそも、誰かと話するのは得意じゃないし、考えてみれば、かしわぎ柏木先生以外の男の人とこんなふうに一対一で話するのは初めてだった。

『やっぱり、今からでも断ろう』そう決心して顔を上げ、口を開こうとした正にその時

『ぎゅるるるっ！』

隠しようのないボリウムの、実にひょうきんな音が、ファミレスの店内に鳴り響いた。

「!？」

芝崎さんの目が驚いたように見開かれ、すぐに愉快そうに細められる。

ついには、耐えきれないように目を伏せて笑い始めた。声を出して笑っている訳じゃない。

でも、肩が小刻みに震えているから、絶対笑ってる！

「ごっ、ごめんなさいっ！」

キヤー！ キヤー！ キヤー！

なんで！？

なんでよりによつて、こんな気まずい雰囲気の人に、鳴ったりするのこのお腹はっ！

「ごめんよ……。もしかして、今まで元気がなかったのって、腹、空いてたせい？」

その質問も、笑いを含んでいる。

「すみませんっ。私、昨夜から何も食べてなくて！」

恥ずかしさで顔が上げられずに、しどろもどろになりながら何とか声を絞り出す。

「俺もちょうど腹ぺこだったんだ。何か食べようか」

「あの、でも私、お金が……」

「ああ。心配しないで、俺のおごり。しがない売れないカメラマンだから、モデル代はそんなに弾めないけどね」

——ほかほかご飯に、お豆腐とワカメのおみそ汁。焼いた鮭に大根おろし。甘い卵焼き。お付け物。

頼んだ和風朝食セットは、空腹なことを割り引いても、涙が出そうなくらい美味しかった。

ここの所、まともな食事をしていなかったのもあるけど、多分、それだけじゃない。

一人じゃない事が最上のソースになったのだと思う。

私の食べる様子を見る芝崎さんの優しい眼差しは、柏木先生を思い起こさせて、胸の奥がチクリと痛んだ。

第5話 【撮影会】

「うーん……。そんなに構えないで！」

「は、はいっ」

肩を上下させて『リラックス！』とジェスチャーを送って来る芝崎さんの言葉に、私は、よけいに緊張して身体が強ばった。

朝食をご馳走になったあと、公園に戻って『撮影会』を始めたのだけど、これがなかなか難しい。

「自然にできていいから、適当に散歩してみて」と、軽く言われたけど、どうしてもカメラの方が気になって、ちらちら見てしまう。

あげくは、同じ側の手足が同時に出てしまい、足がもつれてコケそうになって、芝崎さんを慌てさせてしまった。

今更ながら、よりによってモデルなんて引き受けた自分の行動が信じられない。

って言うか、なんで私にモデルなんて頼んだんだろうか？ そこがそもそも腑に落ちない。

私は、自分の姿をまじまじと見下ろした。

シンプルなブラウンのコートは、多分良い物なんだろうけど借り物だし、その下はごく普通の部屋着に使っている淡いオレンジ色の

ワンピースで、取り立てて特徴も無い。

肝心な中身はと言えば、自分で言うのも何だけど、決して美人じゃない。

茶色い髪の毛は伸ばしっ放しで、長いだけ取り柄の癖っ毛だし、本物のモデルのように背が高い訳でもない。

強いて言えば、痩せている……って聞こえは良いけど、出るトコ出てないだけだし。

そんなことをグルグル考えているうちに、まともな写真も撮れないまま、時間だけが無情に過ぎて行っただ。

日が高くなるに連れて、今朝の静けさが嘘のように散歩やジョギングをする人、観光に訪れる人が増えて来た。

一見して、プロと分かるような機材を抱えた芝崎さんは人目を引くらしく、気が付くと、いつの間にか私たちの周りには人だかりが出来てしまっていた。

「何、雑誌の撮影？」

「あのコ、モデルなの？」

ささやく声がやたらと耳に入ってくる。

ただでさえ写真なんて撮られ慣れていないのに、この状況……。

私は、作った笑顔がヒクヒクと引きつった。

「うん……」

人だかりを「まいったな」と言う表情を浮かべて見渡しながら、
芝崎さんが頭をぽりぽりかいた。

「藍ちゃん！ 少し休憩にしようか」

緊張の極致だった私は、その声にとっと脱力した。

公園の突端にあるテラスのベンチに座り、ぼんやりと景色を眺める。

私が今朝、声を掛けられた正にその場所だった。
眼下には、あの時見た同じ風景とは思えない、活気に溢れた広大な
港湾都市が広がっていた。

所々で、工事をする大きなクレーンが、まるでミニカーのような
サイズで動いているのが見える。

「はい、どうぞ。熱いから気を付けて。ココアで良かったかな？
コーヒーもあるけど」

「あ、はい。すみません。ココアでいいです」

自販機で買って来てくれた紙コップを受け取って、温かい湯気を
顔に当てる。

ほっとするような、甘いココアの匂いが鼻腔をくすぐった。

猫舌なので、冷めるまで少し待つことにする。

「ちよつとここで待ってて。車に機材を置いて来るから」

猫舌には縁遠そうな勢いで、コーヒーをゴクゴクと飲み干して機材を抱えると、芝崎さんは「んじゃ！」と、テラスとは反対方向にある公園の入り口の方に、足取りも軽やかにスタスタ歩いて行ってしまった。

あ、あれ？ もう、終わりなの……かな。

あまりの私のモデルセンスの無さに、きつと見切りを付けたのだらうと思った。

だとすれば、もう彼とはこれでお別れだ。

ズキン——と胸の奥に、なぜか微かな痛みが走った。

第6話 【未知との遭遇】

なんで、こんな気持ちになるんだろう？

自分で自分の気持ちが不可解だった。

たまたまここに辿り着いた私と、たまたま「朝の港の風景」を取りに来たカメラマンの芝崎さん。

私たちは数時間前に偶然会ったに過ぎない。

明日になれば、お互い思い出すこともなく過ぎて行けるはず。
なのに、なんでこんなに別れがたい気持ちになるのか、良く分からない。

「変なの……」

きつとそう。ここ数日の逃亡生活で人恋しくなっているんだ。

ちょうど、お金もなくなつて途方に暮れていた時だし、お腹も空いていた。

そこへ、ちょっと強引だけど、少年のようなあの『100%ウェルカム！』な笑顔攻撃にあつたものだから……。

そう。

この気持ちに、特別な意味などあるはずがない——。

私は、無理矢理自分を納得させて、まだちょっと熱く感じるココアを一口、口に含んだ。

「ブミヤウツ！」

えっ？

妙にしわがれた鳴き声が足下から聞こえて、視線を落としたその時、何かが膝の上に『ポン』と飛び乗った。

私は固まった。

ついでに、ココアを持つ右手の筋肉も固まって、力加減の利かなくなった指の隙間から、紙コップがスローモーションで落ちて行く。

一口しか飲んでないココアは無惨にも、グレーのタイル敷きのテラスの床に、茶色いマーブル模様を描いた。

な、な、何？ 何で、私の膝の上？ これ何？

その、30センチ位の白い毛むくじやらの小動物は、何だかゴロゴロと、どこからか音を発していた。私の方にお尻を向けて座っているのに、顔が見えない。

ただ、茶色いふさふさのシッポが左右にゆっくり振られていた。

犬？ 猫？ 狸？ それとも他の動物なの？

どれにしても、本物を見たことがないから、判断が付かない。私

は固まったまま、ぴくりとも動けなくなってしまった。

ゴロゴロゴロゴロ。

絶え間なく響くその音は、何となく気持ち良さそうに聞こえたけど、どうかしたら怒って噛み付かれそうな気がして、やっぱり動くことが出来ない。

動物は嫌いじゃない。

むしろ好きな方だし、小さい頃はペットが飼いたくて仕方がなかった。

ただ、動物を飼える環境になかったから、動物は、図鑑やテレビのブラウン管の中だけの存在だった。

頭では、そんなに危険は無いと理解していても、身体が言うことを聞かない。

お願い。誰か、助けて！

私は、心の中で悲鳴を上げた。

「藍ちゃん、どうしたの？」

のんびりした救世主の声が背後から聞こえて、私は動けないまま情けない声を上げた。

「し、芝崎さん！こ、これ、どかして下さいっ！」

「あれ？ 珍しいな。ヒマラヤンのノラ公か？」

ヒマラ？ ノラ公？

芝崎さんは、恐れるふうでもなく、ひょいと私の膝の上の小動物を抱き上げて、「お前、良く肥えてるなー」と嬉しそうに頭を撫でている。

「もしかして、猫、苦手だったりする？」

ああ。猫。猫なんだ――。

思わず、はーっと安堵の溜息が漏れた。

「苦手じゃないですけど、触ったことがないんです……だから」

「怖いんだ？」

「はい……」

「お前、怖いんだってよ。まあ、ふてぶてしい顔はしてるけどな」

ほら。と、地面に放された猫は「ブミヤウツ！」と一鳴きして、再び私の膝の上に飛び乗ってきた。

今度は私の方を向いて、やっぱりゴロゴロいっている。

「どうやら、気に入られちゃったみたいだね。嫌じゃなかったら頭を撫でてごらん。喜ぶよ」

喜ぶ？

私は、恐る恐る猫の頭をそつと撫でてみた。すると途端に、ゴロゴロが倍の音量になった。

わ。何これ？ 面白いかも。

「あ、あと、あごの下も撫で撫でポイントだから」

言われるままに今度は、あごの下をこちょこちょ撫でてみると、猫は撫でやすいようにクイツと喉を上げて、気持ちよさそうに目を細めた。

その顔は、何だか笑っているように見えて、思わずクスリと笑いが漏れた。

第7話 【さようなら】

「今日は、一日ご苦労様。お陰でいい写真が出来そうだよ。ありがとう。こんな時間まで悪かったね」

芝崎さんのその言葉で、私の『一日モデル』は終わりを告げた。

結局、あの後、大きなカメラの代わりに持ってきた手のひらサイズのデジカメで撮影を続けて、今はもうすっかり日も陰り、賑やかだった公園も、人影がまばらになっている。

公園の展望台から見える薄闇に浮かぶ港の風景は、夜明け前とも昼間とも違う表情を見せていて、キラキラ輝く町の灯りは満天の星空を思わせた。

吐く息が白い。

かなり気温も下がってきていた。

「お昼までご馳走になってしまつて、すみませんでした」

私は、ぺこりと頭を下げた。

もう、これで本当にお別れ——。

「はいこれ、バイト代。少なくて申し訳ないけど……」

私は、差し出された茶封筒をありがたく受け取った。

『受け取れません』とは言えない。実際問題として、お金は必要だった。

「あの、一つお願いがあるんですけど……」

「なに？ 俺に出来ること？」

「あの向日葵畑の写真、頂いてもいいですか？」

「ああ。気に入ってくれたんだ？」

『喜んで』と向けられた笑顔を見ていたら、なんだか鼻の奥にツンとこみ上げて来て、思わず俯いた。

弱気になっちゃダメだ。

まず泊まるところを決めて、明日になったら仕事を探そう。

今日一日の出来事は私に、『自分でもお金が稼げる』と言う自信を持たせてくれた。

あの向日葵の写真はきつと、挫けそうなこの心を勇気付けてくれる。

「はいどうぞ」

「ありがとうございます」

公園の駐車場で写真を受け取り、私はもう一度深く頭を下げた。

「さようなら」

声が少し震えるのは、たぶん寒さのせい。

私は、顔を上げて何とか笑顔を作ると、そのまま一歩、二歩後ずさる。

そして、きびすを返して夜の街へと歩き出した。

「藍ちゃん！」

芝崎さんの声に、ゆっくり振り返る。

「泊まる所がないんなら、俺の所に来るかい？　あまり綺麗とは言えないけど、宿泊無料で夕飯付き！」

きつとそれは、お金も行く当てもない事を察した彼の、ただの親切心——。

それでも。

私は、このまま芝崎さんと別れずに済むことが、嬉しかった。

第8話 【ありがとう】

芝崎さんの住まいは、東京の郊外にあるシンプルな二階建ての木造アパートだった。

幹線道路から少し奥まった住宅街の一角に立ち並ぶ、白っぽい外壁の同じデザインをした木造アパート。その一番奥の棟、『サン・ハイツA』の日当たりが良さそうな、二階の東南の角部屋。そこが芝崎さん曰くの『我が城』。

「狭くて汚いけど、ちょっと我慢して。たぶん、野宿よりはマシだから」

ちよっぴり緊張しながら、「お邪魔します」と、足を踏み入れる。

そこには、今まで私が見たこともない空間が広がっていた。

間取りは、1DKと言うのかな？

半畳ほどの玄関を入ると、すぐ左側にミニキッチンと水回り。奥にコタツの置かれた、四畳半くらいの板の間。

更にその奥に和室があって、ベットが置かれている。

その全てが玄関から見渡せた。

凄くコンパクトな部屋だと思ったけど、芝崎さんの言うように『汚い』とは思わなかった。

「適当に座つて。今、夕飯に何か作るから」

と彼は、奥の板の間のファンヒーターとコタツのスイッチを入れ、私に座るように促すと自分は腕まくりをしながらキッチンに向かう。

「あの、手伝いましょうか？」

「お客様は、座ってなさい。大丈夫。それでも、料理の腕はなかなかんだ」

「すみません」

お言葉に甘えて、コタツに座らせてもらう。

そう言えば、コタツに入るのも初めてなんだ、私。

温かい――。

冷えた身体に、ほっこり温もりが心地よい。

「あの、ご家族はいらっしゃらないんですか？」

キッチンで、キャベツを切り出した芝崎さんに、何気なく思いついたことを質問した。

「家族はいないんだ」

ごくさりと返って来た答えに、ドキリとする。

「親は、俺が八才の時に交通事故で二人仲良く墓の中。兄弟もいな

いいし、親戚とは疎遠だね。気楽な物さ」

そう言って芝崎さんは、軽く肩をすくめた。

その横顔は、まるで世間話をするような淡々としたもので、語られた言葉の深刻さを微塵も感じさせない。

天涯孤独――。

およそ、この人には似つかわしくない単語が浮かんだ。

「あ……すみません」

私は、無神経に口にした言葉を恥じて、ペコリと頭を下げたままうつむいた。

よく考えれば、同居の家族がないのは一目瞭然だった。

玄関には、芝崎さんの靴しか置いてなかったし、家財道具を見ても、一人暮らしなのは想像出来たはず。

それを、考えなしに聞いてしまった……。

「それ、止めにしない？」

柔らかいトーンの声に、思わず顔を上げる。

「はい？」

それって、どれ？

言葉の意味が掴めずに、頭の中を疑問符が駆け抜ける。

「あの……すみません。良く分かりません」

「それ。その『すみません』ってヤツ」

「あ、あの……？」

「藍ちゃんさ、自分では気付いてないかも知れないけど、その『すみません』って、口癖になってるよ。別に悪いこと、聞いてないだらう？」

今度は長ネギを見事な包丁さばきで、リズムカルに切り出した彼の横顔に、私は思わず『すみません』と言いそうになって、言葉に詰まった。

うつうつ。私ってそんなに『すみません』って言ってるんだらうか？

そうかも知れない。

つい、人の顔色を伺うような癖が付いているのかも……。

「まあ、悪いことしても、謝るってこと知らないヤツが多いから、君みたいな人、貴重だとは思っけどね」

『よっ』と、ビニール袋から取り出した白っぽい固まりを二つ、沸かした鍋に入れると、私の方に顔を向ける。

「でも今度もし、『すみません』って言いそうになったら、こう言ってごらん。『ありがとう』」

「ありがとう?」

「そう。プラス笑顔で、怖い物なし!　これが俺の処世術」

そう言って芝崎さんは二カつと、あの『100%ウェルカム』な
笑顔を浮かべた。

「あ……りがとう、ございます?」

真似して、ニコリと笑顔を作ってみる。

「そう、それ!」

少年のような嬉しそうな笑顔――。

その笑顔につられて気が付いたら、私の作った笑顔は、いつの間
にか本物の笑顔に変わっていた。

第9話 【初めての味】

「あり合わせだけど、どうぞ」

トンと、目の前に置かれたのは、えび茶色のラインの入った大きな白いどんぶり。

茶色いスープの中には、黄色い縮れた麺とキャベツに半熟の落とし卵。その上には綺麗に小口切りされた長ネギがこんもりと乗っている。

ミソ風味の何とも言えない美味しそうな匂いが、熱々の湯気と共に立ち上って、食欲中枢を刺激した。

うわ……、美味しそう。

思わずお腹が『ぐう』と催促をする。

「インスタント・ラーメンだけど、もしかして初めて食べるのか？」

「はい。初めてです。スパゲッティは良く食べましたけど」

「ホントに!？」

「はい」

『いただきます』をして、猫舌用に出してくれたおみそ汁のお椀に小分けしながら、少しずつ麺をすすする。

初めての味が口いっぱいに広がった。

——ラーメン。これがラーメンなんだ。

しみじみ感動する。

何だか、今日は初めての経験ばかりしている。

ファミレスに、写真のモデル……猫が嬉しいと喉をゴロゴロ鳴らすのも分かったし、コタツにラーメンも。

驚きの連続だったけど、それは決して嫌な感覚じゃないくて、ドキドキする楽しさがあった。

それは、たぶん、私の目の前にいるこの人のお陰。

つくづく、不思議な人だと思う。

少年のような屈託の無い笑顔で、警戒心なんかどこ吹く風で、ずるりと私の心の中に入って来てしまった。

私は、とても特殊な環境で育っていて、接触する人間がごく限られていたために、知らない人間が極度に苦手だ。

苦手と言うよりむしろ、恐怖の対象と言った方が言い得ているかもしれない。

いきなりポンと放り出された『外の世界』は、恐怖で満ち溢れていた。

タクシーはまだしも良かったけど、初めて乗った電車では、中年の酔っぱらいが何か訳の分からないことを言って絡んできたり、人混みに紛れて身体を触られたりとか、ろくな経験をしなかった。

だから、あの公園で芝崎さんに声を掛けられたとき感じたのは、『恐怖』。

なのに今、私はこうして、芝崎さんのアパートでコタツを囲んで、ラーメンをすすっている。

本当に、不思議な人。

チャプン――。

コンパクトな白い空間に、気持ち良さに思わず口を突いて出た『ふう』と言う溜息が反響した。

畳一畳にも満たない広さに、小さな湯船とおもちゃみたいな洗面台。

『ユニット・バス』と言うのだそうだ。

小柄な私でも、膝を曲げてやっと座れるような小さな湯船だけど、何日かぶりで入ったお風呂は、疲れ切った心と体を芯から温めてくれる。

——あの人は、どうしているだろうか？

ふと、懐かしい面影が脳裏に浮かぶ。

私を育ててくれた『柏木先生』は私にとってお父さんのような人で、白衣の似合うお医者さんでもある。

メガネの奥の穏やかな瞳は、いつでも私たちを見守っていてくれた。

そう私たち。

私と彼女を——。

「藍ちゃん。着替えここに置いておくから」

不意に掛けられた声に、はっと我に返った。

「あ、はい。すみま……」

すみませんと言いつうになつて、慌てて「ありがとうございます！」と言いつ直す。

扉の向こうからは、微かな笑い声が聞こえた。

——ほんと。口癖になつてゐるんだ。

そう実感した。

第10話 【溜息の理由】

「じゃあ、俺はこっちの板の間の方に寝るから、君はこのベッドを使つて。一応、シーツは換えといたから」

一番奥の和室を、板の間から移して来たファンヒーターで暖めてくれた芝崎さんは、自分は薄い毛布一枚を押入から取り出すと、そう言つた。

「え？　じゃあ、芝崎さんはどこで寝るんですか？」

「俺は、コタツで寝るから大丈夫。普段でも良くやるんだ。遠慮しないでベット、使つて」

はい？

コタツで寝るって……。あの小さいコタツじゃ完璧に芝崎さんの身体、収まらないんじゃない？

その上、薄い毛布一枚。

「んじゃ。お休み」

ちよつ、ちよつとそれはいくら何でも、風邪を引いちゃう！

私は、板の間に行こうとする芝崎さんの腕を慌てて掴んだ。

「こちらの部屋で、一緒に寝ましょう！　その方が、暖かいです！」

「は？」

なぜか、芝崎さんの動きがピタリと止まる。

私の顔をまじまじと見下ろすその表情も、身体と同じで驚いように『ピキッ』と固まっている。

あれ？

私、何か変なこと言ったのかな。

「……それは、いくら何でも、マズイでしょう？　一応これでも、男だからね」

ははははっ、と引きつり笑いをしながら行こうとするその腕を、必死で掴んだ。

「でも、風邪を引かれては私が嫌です。困ります、ここに居て下さい。私、気にしませんから！」

芝崎さんは、何かに救いを求めるように、天井を仰ぎ見た。

「でなければ、私がそちらで寝ます！」

恩人に、風邪を引かせてしまったては、居候として立つ瀬がない。

それに、『風邪は万病の元』だから甘く見てはいけないと、良く柏木先生が言っていた。

しばしの沈黙が、ファンヒーターの熱で暖まり始めた和室に流れる。

『ふう』と一つ溜息をつく、「……分かった。そうするよ」と妙に気抜けしたような返事が返って来た。

セミダブルのベットに、二人はちよつと狭かったけど、板の間の小さなコタツで寝るよりは、断然ましなはず。

これで、心おきなく眠れる。

「お休みなさい」

私は、隣で背を向けて横になっている芝崎さんにその声を掛けて、目を閉じた。

「……ああ。お休み」

しばらくぶりで足を伸ばして眠れる開放感と、芝崎さんの背中から伝わる温もりを感じながら、引き込まれるようにすうつと眠りに落ちて行く。

そのまどろむような意識の下、どこかで『はあ……』と言つ長い溜息を聞いたような気がしたけど、気のせいかもしれない。

第11話 【新しい先生】

私と『彼女』は、物心が付いたときには既に一緒に生活をしていた。

少しだけ年上の彼女を私は『お姉ちゃん』と呼び、彼女は私を『藍ちゃん』と呼んで、まるで双子の姉妹のように仲が良かった。

お姉ちゃんは私と違って、とても綺麗な真つ黒な髪の色をしていた。

肌の色も真つ白で、まるで絵本の中の『白雪姫』みたいで、私の密かな憧れだった。

でもその性格は、お姫様のような外見とは正反対でとても明朗快活で、人見知りの私はいつも彼女の後ろを付いて回っていた。

「藍ちゃん！ 早く早く！」

それがお姉ちゃんの口癖。

寝るのもご飯を食べるのも、遊ぶのも、生活の全てを私たちは一緒に過ごした。

何の悩みもない、楽しい毎日。

そんな生活の中、かしわぎ柏木先生に出会ったのは、私たちがまだ六歳だった頃――。

そのころ私たちの親代わりになっていたのは、おじいちゃんのような優しい『衣笠先生』^{きぬがさ}で、細長い顔に白髪のもじやもじや頭と、人の良さそうな目尻の笑いじわの持ち主だった。

いつも、大きな温かい手で頭を撫でてくれる先生が、私たちは大好きだった。

その日の、三時のおやつの間。

一日の大半を過ごしていた遊戯室の六人掛けの丸テーブルの上には、いつものように、世話係の前田さんの手作りのクッキーやお菓子がカラフルに並んでいた。

私たちと一緒にテーブルを囲んでいたのは、前田さんと衣笠先生、そしてその日初めて見るメガネをかけた、衣笠先生よりも大分若い男の人――。

「このおじちゃん、だあれ？」

私の質問にその人は一瞬、口に含んだコーヒ―を吹き出しそうになって、少し傷ついたような表情を浮かべた。

日本茶をすすりながらその様子を見ていた衣笠先生が、「藍ちゃん、せめて『お兄さん』って呼んであげなさいね。この人はまだ、若いんだからね」と愉快そうな笑い声を上げ、コホンと一つ咳払いをしたあと、

「この人は、^{かしわぎこうすけ}柏木浩介先生。君達の新しい先生だよ」と、紹介してくれた。

その言葉に、私と彼女は驚いて顔を見合わせた。

「じゃあ、衣笠先生は！？ どこか行っちゃうの！？」

思わずハモってしまった私たちに衣笠先生は、「先生はね、ずっとお休み無しでお仕事していたからね。ちょっとまとめてお休みを貰う事にしたんだよ……」と、ちよつと寂しそうな笑顔を向けた。

そして、その言葉通りに、それから柏木先生が私たちの親代わりになった。

衣笠先生が『大学の先生だった時の教え子』だと言う若い柏木先生が、私たちはすぐに大好きになった。

「先生はいくつなの？」

興味津々のお姉ちゃんの質問に先生は、衣笠先生と同じようにしやがんで、私たちの目線に自分の目線を合わせて答えてくれた。

「二十九歳だよ」

「お嫁さんはいるの？」

「いないよ」

「それじゃ、大きくなったら私たちが先生のお嫁さんになってあげるよー！」

ハモる私たちに先生は「そうだね。楽しみに待っているよ」と、優しい穏やかな笑顔を浮かべた。

私は、その笑顔が大好きだった――。

第12話 【留守番 - 1】

やけに温かい。

ぬくぬくする。

ここの所、こんなに暖かい感覚で目覚めるの、久しぶり……。

「あれ？」

目を開けた私は一瞬、自分がどこにいるのか分からずに、がばつと飛び起きた。

六畳くらいの、見覚えのないシンプルなモノトーンの和室――。

枕元にある出窓の淡いグレーのカーテン。そのカーテンの隙間から、朝の明るい日差しが木漏れ日のように部屋の中に降り注いでいて、まぶしさに思わず目を細める。

敷かれている暗いグレーの絨毯上のセミダブルのベット。

そこに私は座っていた。

「あ…… ああ。そうか」

寝ぼけた頭にかやつと血が巡り、昨日のことを思い出した私は、隣で寝ていた筈の家主さんの姿を探した。

シンとした室内には、彼の姿はない。

「芝崎さん？」

隣の板の間との境の襖を開けて、声を掛けてみたけど返事がない。
ふと視線を落とすと、コタツの黒い天板の上に、一枚の白いメモ
と五千円札が置かれていた。

『 大沼 藍様

今日から三日間、仕事で留守にします。

部屋の物は自由に使って下さい。

冷蔵庫の物は食べてしまってください。

（賞味期限に注意！）

表通りに出てすぐのところにコンビニがあるので、足りない分は
これで買い足して。

何かあれば、携帯に連絡を。

携帯 090 4885 ××××

芝崎 拓郎 『

——私、ここにいていいんだろうか？

「迷惑じゃ……ないのかな？」

今、特定の場所にいない方が良いのは分かっていた。
もしも、ここで追っ手に見つかれば、確実に彼に迷惑がかかって
しまう、はず。

それに、ここは郊外とは言え『東京』。本当なら、一番近付かな
い方が良い場所だった。

迷いが胸をかすめる。

でも。

嬉しさの方が遙に大きくて、すぐにその迷いは消えてしまった。

『自分の居場所』が出来たことが、ただ、嬉しかった。

「うん。ちょっと寒いけど、いいお天気！」

冬の朝の澄んだ空気が心地よい。

私は、開け放した南向きのベランダの窓から外を見渡すと、一つ
大きく深呼吸をした。

午前八時。

路地奥にあるこのアパートの周りにも、朝の活気が溢れていた。

ジョギングをする中年の男性。

のんびりと、犬の散歩をする主婦らしき人。

足早に学校へ急ぐ学生の群れ。

穏やかで、そして当たり前前の風景。

その全てが新鮮だった。

——何をしようかしら？　と思案の結果、部屋の掃除をすることにした。

元々そんなに散らかっている訳ではなないけど、やっぱりそこは男の人の一人暮らしの部屋で、『隅の方に埃がこんもり』としていた。

さすがに、『はたき』は置いていないようなので、雑巾を固く絞って窓のサンや家具の上の埃を拭き取って行く。

「前田さん、心配しているかしら……」

ふと、子供の頃からの世話係だった優しい女性の顔が浮かんだ。

こう言う掃除の仕方はその人が教えてくれた物だった。

掃除だけではない。

料理や裁縫、生活していく上で必要なことはその人にみんな教わった。

両親のいない私にとっては、『母親』そのものだった。

その人にも、もう会うことは出来ない……。

トントーン――。

不意に起こったドアのノック音に、はっと我に返る。

――誰？ まさか……。

一瞬、『居留守を使っ飛ばしておうか？』と言う考えが頭をよぎったけど、窓は開け放してあるし、玄関自体に鍵を掛けていないので、このまま黙っていてもドアを開けられてしまえば隠れようがない。

私は観念して、おそろおそろドアを開けた。

第13話 【留守番・2】

「こんにちは。大沼 藍ちゃんね。私は佐藤、ここのアパートの大家です」

ドアの向こうには、そう言うてにこやかに笑う五十代後半くらいの、ふくよかな女性が立っていた。

へなへなと、思わず肩の力が抜けてしまう。

——そうよね。

いくら何でも、昨日の今日で私の居所が知られる訳がない。

「こ、こんにちは！」

ニコニコ笑顔のままの大家さんに『ぺこり』と頭を下げながら、芝崎さんの留守中に一人でここにいる経緯をどう説明しようかと、せわしなく考えを巡らせる。

けど。

「あの……。芝崎さんは、仕事に出掛けているんですが……。帰りは、三日後だそうです」と、何の芸もない答えしか出てこない。

そんな私を不審がる様子もなく、うんうんと、『分かっているわよ』と言うように大家さんは頷いた。

「今朝ね、芝崎君が家に寄って行ってね、」女の子が家に居るから、

自分が留守の間、お願いします”って頼みに来たのよ」

大家さんは『バチン』とウインクをすると、嬉しそうにそう言った。

「あの子が、女の人を部屋に連れて来るなんて初めてだから、”これは早速、見に行かなくっちゃ”って来た訳よ。ああ、これ嫁に行った娘のお下がりだけど、良かったら着てみてね」

と、大家さんから大きな紙袋を二つ渡される。

『娘のお下がり』だと言った袋の中には、ぎゅちりと、真新しい洋服が詰まっていた。

「あ、あの。すみま……、ありがとうございます！」

また「すみません」と言い掛けて、慌てて言い直した。

「あら、おいしい！」

四畳半のコタツに向かい合って座ると大家さんは、私が入れた日本茶を一口飲んで、少しびっくりしたように呟いた。

『お茶も、入れ方次第なのよ』と、美味しいお茶の入れ方を伝授してくれた、母のような前田さんの穏やかな笑顔が浮かぶ。

「ありがとうございます」

それは、ほめてくれた大家さんと、前田さんに向けた言葉。

「でも、安心したわ。あなたのような可愛らしいお嬢さんで」

大家さんは、心底安堵した様子でニツコリ笑うと、何処か寂しげな遠い眼差しを開け放たれた窓の外に向けた。

「芝崎君、ああ見えて苦労人でね……。ご両親の事は聞いている？」

「はい……。子供の頃、事故で亡くされたとか……」

「あれは、ひどい事故だったわ……」

昔を懐かしむように、悲しみをたたえた眼差しで語る大家さんの言葉に、私はただじつと耳を傾けていた。

第14話 【留守番 - 3】

十九年前の寒い冬、その事故は起こったのだそうだ。

居眠り運転の十トントラックが、信号待ちをしていたタクシーに突っ込む悲惨な事故。

乗客は三名で、大家さんの友人の若い夫婦と八才の息子――。

芝崎さんにご両親だった。

ご両親はほぼ即死。タクシーの運転手も数時間後、病院で死亡した。

ご両親がとつさに庇ったのであろうその子供――芝崎さんだけが重傷だったものの、奇跡的に助かったのだ。

彼の背中にはその時の大きな傷が、未だに消えずに残っているのだと言う。

「保険金目当ての親戚を、たらい回しにされてね……。大分嫌な思いをして来たはずよ」

『保険金目当て』

『親戚をたらい回し』

大家さんのその言葉がショックだった。

『親戚とは疎遠だね』と、昨日、素つ気なく言った芝崎さんの言葉が思い出されて、私は今更ながら、無神経に家族の事を聞いた自分が情けなくなった。

「中学を卒業すると、私の所へ来てね……」

『おばさん、働いて必ずお返しします。ここに下宿させて下さい』

畳にキチンと正座をして、深々と頭を下げる芝崎さんに大家さんは言ったのだ。

「分かったわ。ここに来なさい。アパートに空いてる部屋があるから、そこを使うといいわ」

”返して貰うお金は多い方が嬉しいから、学費も出すわよ”と
言う申し出を、芝崎さんは丁重に断わった。

その後自力で働きながら、定時制の高校と通信制の大学を卒業すると、好きだったカメラの道へと進んだのだ。

「彼ね、仕事先で良く動物を拾って来るのよ。まあ、子猫だったり、子犬だったり、自力で生きられそうもない子達ばかりだけどね」

私の顔に意味ありげな視線を走らせると、大家さんの顔に笑みがこぼれた。

「大抵は、新しい飼い主を見付けて来るんだけど、それまでは家が預かり所になっているの。今も何匹かいるから、後で遊びに来なさいな」

そう言い残して、大家さんは、来た時と同じようににこやかに帰って行った。

私は、表面からは伺えなかった芝崎さんを知ることができて嬉しい反面、その事実が胸が痛んだ。

あの屈託の無い笑顔がどれ程の心の痛みの上に成り立っていたのか、それを思うと、いたたまれなかった。

——強い人だ。

強くて、優しい人。

あの美しい優しい風景。

あれはきっと彼の心その物だと、そう思った。

三日後の夜、仕事を終えた帰ってきた芝崎さんは、「お帰りなさい！」と笑顔で出迎えた私を見て、少し戸惑ったような表情をした。

たぶん、もう私はここに居ないだろうと思っていたんだと思う。

でも、それはすぐに『あの笑顔』に変わった。

「ただいま」

それは予感。

私はきつとこの人を好きになる。

ううん。もう既に好きになっているのかも知れない――。

第15話 【恋人未満】

「へえ」。あなたが拓郎の彼女なんだ」

私は、頭のとっぺんからつま先までしげしげと観察されて、恥ずかしさに俯いた。

『お正月だから、おせち料理を食べに来なさい』と大家さんに誘われて、私は芝崎さんと一緒に、アパートの隣にある大家さんの自宅にお邪魔していた。

大家さんの家には、お嫁に行った長女的美奈さんが小さな男の子を連れて里帰りしていて、玄関で会うなり、私はしげしげと観察されたのだった。

ショートボブの黒髪に猫を思わせる少しつり加減の大きな瞳。女性らしいグラマーなスタイル。

母性を感じさせる豊かな胸が、私のコンプレックスを刺激した。

「これ、美奈。いい加減にしなさい。藍ちゃん困ってるじゃないの」

大家さんが助け船を出してくれたけど、「はいはい」と腕組みして見下ろす顔は、不敵に微笑んでいた。

広い十二畳の和室の、アパートの十倍はありそうな大きな家具調

コタツをみんなで囲んで、おせちでお昼ご飯になってすぐ

「で、十七歳って本当なの藍ちゃん？」

と、待ってましたと言わんばかりに興味津々の、美奈さんの質問が始まった。

「はい。十七です。四月で十八歳になりますけど」

「ひえーっ、拓郎、それって犯罪じゃない！ 大丈夫なの？ 店子がお縄頂戴じゃしゃれにならないよ？」

明らかに面白がつてる美奈さんの質問に、珍しく仏頂面をした芝崎さんが「俺は、何も悪いことはしていません！」と胸を張る。

「ええっ!？」

大家さんと美奈さんが同時に驚きの声を上げた。

「二ヶ月も同じ屋根の下に住んでいて何もないの!？ 拓郎、あなたどこが悪いんじゃないの!？」

絶対嘘だと言わんばかりの美奈さんの言葉に、ますます芝崎さんの仏頂面が酷くなった――。

意外。こう言う顔もするんだ……。

芝崎さんの言った事は本当。

この二ヶ月間、私たちの間にはいわゆる『恋人』と言えるような事は何もなかった。

あれは一緒に住むようになって一ヶ月くらいたった夜のこと。

TVではクリスマス特番の恋愛ドラマが放送されていて、食後のコーヒーを飲みながら二人で何となく見ていた。

「あなたが好きなの。ずっと好きだったの。愛してるのっ！」

粉雪の舞い散るクリスマスツリーの前で、主人公の女の子が涙に濡れながら男の子に告白する。色々な紆余曲折の末、やっと告白してきた彼女にクリスマスの奇跡が訪れる。

「俺もずっとお前が好きだった」

初めての口づけ。交わされる抱擁――。

甘いメロディーが流れて画面が切り替わり、ホテルの一室でラブシーンが繰り広げられ始めた。

一糸纏わぬ姿で抱き合う恋人達。

私だって知識としては一応理解しているので、『そう言えば』と心配になって聞いてみた。

「芝崎さん」

「なに？」

「芝崎さんは、セックスしたいと思ったりしないんですか？」

真面目に聞いたのに、彼はなぜか飲んでいたコーヒーを吹き出した。

ゲホゲホと苦しそうにむせたあと、無言で私の顔を見返す。

「あの……芝崎さん？」

「今、なんて言った？」

「え……？ だからセック」

「分かった！ よく分かった……」

私の言葉を遮るようにそう言った後、ひとつ大きな溜息をつく。

「で。藍ちゃんはどうなの？ 俺と、その、したいと思うの？」

「よく分かりません」

正直、本当に分からない。

芝崎さんのことは、好きだと思う。

それを恋と呼ぶのか、愛と呼ぶのかは分からないけど、一緒にいたいと思う。私に出来ることなら何でもしてあげたいと思う。

でも、それは暖かい穏やかな気持ちで、芝崎さんの言う「したい」と言うのとは違う気がする。

だから、やっぱり分からない。

「だったら、焦ることないんじゃない？」

「そうですか？」

「……たぶん」

それ以来、その話題が出たことはない。

「で、やっぱりあなた達、本当に何もないの？」

お昼の後、キッチンで後片づけをしていた時、美奈さんが今度は真面目な顔で聞いてきた。

「はい。何もないです」

答える私の顔をジッと見詰める。

「そっか。……大切なんだね」と、ぼそつと呟いた。

「はい？」

「いや、拓郎がさ、藍ちゃんを大切に思ってるんだなーって思ったわけよ」

「そう……なんでしょうか？」

「そうそう。男って、そう言うものなのよ。相手を大切に思っていればいるほど、手が出せないって思う生き物なのよね」

「はあ……」

そう、なんだろうか？ 本当にそう思ってくれているのなら、嬉しいけど……。

『何とも思っていない』と言う可能性もなきにしもあらず…… よね？

私がそんなことをうだうだ考えていたら、美奈さんが堪えきれなくなつたように、クスクスと笑い出した。

「いい。いいわあなた。藍ちゃん。気に入った！ あなたみたいな人なら、きっと上手く行くよ。まあ頑張んなさい。あたし応援するから！」

ニツと浮かんだ笑顔は、人の良い大家さんの顔にちよっぴり似ていた。

第16話 【お母さん】

両親がいない私とお姉ちゃんにとっては、世話係の前田さんが『お母さん』。

エクボが出来るふくらほっぺの穏やかな丸い顔は、いつも私たちに安心感くれた。

いつも優しく、かといって甘いわけではなく、時には厳しく、私たちを見守っていてくれた。

料理もお裁縫も、ついに行儀見習いも、本当は『ママ』に教わるはずだった事をたくさん教えてくれた。

何でも作ってしまう前田さんの手は、幼い私にはまるで魔法の手のように映った。

最初に教わった料理は、バレンタインで柏木先生にプレゼントした『ハートのチョコレート』。

あれは、柏木先生が私たちの先生になった最初のバレンタインデ
イ。

私もお姉ちゃんも、まだ六歳。

はつきり言って、おままごとの延長だった。

全身チョコレートまみれになってやっと出来上がったときには、もう先生は仕事を終えて自分の部屋に戻ってしまっていた。

「先生、今日はお仕事早く終わったの？ いつも、」 藍たちがおや

すみするまで、お仕事だ”って言うてるのに……”

首を傾げる私たちに前田さんは、ちょっと哀しい顔を向けた。

「藍ちゃん達。このチョコレート、柏木先生のお部屋まで持って行ってあげなさい」

「えっ？ いいのー？ いつもは”お部屋には、行っちゃダメ”って……」

「今日は、いいのよ。せっかく頑張って作ったんですもの。行ってらっしゃい。お部屋に入るときは、ちゃんとノックをするのよ」

「は……い！」

確かに前田さんに言われた通り、私たちは、『ノックをして』先生の部屋に入った。

ただ、ノックをしただけで返事を待たなかったけれど。

がちやり！

勢い込んで開けたドアの向こうには、大きな本棚の前で何かビンのようなものを握りしめて、先生が佇んでいた。

その頬を伝っている光の粒が、涙であることは幼い私たちにも一目で分かった。

先生が、泣いていた――。

「先生！？ どうしたの！？ どこか痛いなの！？」

驚く私たちの音声多重放送のような声が室内に響く。

「いや、何でもないよ。大丈夫。ちょっと、目にゴミが入っただけだよ。どうしたんだい？」

先生は手に持っていた瓶を棚に戻して、私たちをソファーに座らせた。

「二人だけで来たのかい？ 前田さんが心配するだろう？」

「大丈夫よ！ ちゃんと言って来たから！」

ね、と私たちは顔を見合わせる。

「はい、先生！ これプレゼント！」

可愛くピンクの包装紙でラッピングしたチョコレート差し出した。

「開けてみてもいいかい？」

「うん！」

出てきたハート形のチョコレートを見て先生は一瞬、キョトンとした。

「は……」

やっと、そのチョコレートの意味に気付いたのか、しばらくしてから先生の口からクスクス笑いがもれた。

「ありがとう、嬉しいよ。先生、初めてもらったよ」

笑顔になった先生は、私たちの頭を代わる代わる、くしゃくしゃとかがき回した。

後で前田さんにそのことを伝えると、「柏木先生の、先生が亡くなったの。ええとね。死んでしまったのよ」

そう教えてくれた。

「死んでしまった？」

幼い私たちには、まだ『死』というものがなんなのか、良く分かっていなかった。

「大好きな人がもう会えない遠い所に行っちゃって、先生は悲しかったのよ。人はね、そう言うとき悲しくて泣いてしまうものなのよ。でもそれは、決して恥ずかしい事ではないの」

私たちは前田さんの話に、わんわん泣いてしまった。

「大好きな人に、もう会えない」

その言葉が、幼心にとってもショックだったから――。

第17話 【淡雪】

2月14日のバレンタインの夜――。

今日はとても寒い日で、夕方からの雨がみぞれに変わった。

私は、手作りのチョコレートと、ちょっと豪華な夕食とワインを用意して、芝崎さんの帰りを待っていた。

今日は、バレンタイン。一年に一回女の子から告白出来る日――。

「告白か……」

コタツの上に並んだ料理を眺めながら、一つ溜息をつく。
よく考えてみると、私たちはお互いに想いを伝えあつた訳じゃない。

あの日。

港の見えるヶ丘公園で出会ってから、行き場の無い私を自分のアパートに住まわせてくれている芝崎さん。

私は、ただその好意に甘えて今まで来てしまった。

それは、『家出娘とその保護者』な関係で、決して恋人と呼べるものじゃない。

料理をしたり掃除や洗濯をしたり、家事をして彼の帰りを待つ日々はあまりに穏やかで、逆に時々どうしようもなく不安になる。

――私は、ここにいていいの？

——私は、あなたを愛してもいいの？

答えは出ない。

ううん。最初から出ている。

私はずっとここにはいられない。

あなたとずっと一緒にはいられない。

それなら……。

それなら？

ピンポーン——。

インターフォンの音にはっと我に返る。

ガチャリとドアの開く音と同時に、外の凍るような冷たい空気が一気に暖まった室内に流れ込む。

慌てて玄関の方に視線を向けると、雪まみれになった芝崎さんがばたばたと雪を払っていた。

「ただいま。とうとう降り出したよ雪」

「雪？ 雪になったの？」

「ああ。淡雪だから、そんなには積もらないだろうけど、もう一面、真っ白になってるよ」

私はサンダルを引っかけて、外に顔を出した。

「あ……」

視界に飛び込んできたのは、闇の中浮かび上がる一面の白い色彩――。

家も道路も木々も全てが白い色彩で覆われている。

雪の降り積もる微かな音だけが、静謐せいひつなその世界を支配していた。

「綺麗――」

「雪、見たの初めて？」

「はい」

私は、廊下の手摺りから手を伸ばして、雪を広げた手のひらで受け止める。

降っては融けるその姿は、どこか儚くて切ない。

「よし！ ちょっと遊ぼうか。外に行くから暖かい格好して」

まるでやんちゃ坊主のように芝崎さんが『ニカッ』と笑った。

はい？ 遊ぶ？

前から少年の様な所のある人だとは思った。思ったけど……。

「ちよっ、ちよっと待って！」

「待ったなしって言っただろう。ルールは守らなくちゃ行けないよ」
そう言うつと芝崎さんは私の両頬に、両手に持った雪玉をパチンと塗りつけた。

「きゃあ！ 冷たっ！」

「ほい次。じゃんけんぽん！ はい藍ちゃんの負けー」

「も、もういいですー！」

何のことはない。じゃんけんで負けたら『頬にゆき玉ぱっちん』
と言う遊びなんだけど――。こんな遊び本当にあるんだろうか？

アパートの人気のない駐車場。

淡い街灯の明かりに、舞い散る雪がキラキラと反射している。

その中で子供のようにはしゃぐ大人？ が二人。

「はい遠慮しないで、頬っぺ出して！」

「いつ、いいです！ 遠慮しますっ……きゃっ!？」

顔を両手で庇って後ずさった右足が雪に取られてずるっと滑った。
スローモーションで世界が回転する。

地面に後頭部激突を覚悟して目をぎゅっとつぶった瞬間、ふわり
と力強い腕に抱き止められた。

「ごめんごめん。調子に乗りすぎた」

目を開けると、覗き込む芝崎さんの心配げな瞳。その余りの近さにドキリ——と鼓動が高鳴った。

「何か悩んでる事とかある？」

「えっ……」

私を抱え込んだまま問いかける真っ直ぐな瞳は、心の奥底にあるものを見透かされそうで怖い。

「何だかこの頃沈みがちだと思ってさ……。俺には言えないこと？」

「……あの」

そう、今日はバレンタイン。

「うん？」

女の子から告白しても許される日。

「私のこと好きですか？」

「……好きだよ」

「だったら、キスしてもいいですか？」

一世一代の決意を込めて言ったのに、芝崎さんはしばらく固まったあと、『ぶっ』と吹き出した。

そのまま肩を震わせて笑っている。

「あの？」

また、何か変なこと言っただろうか？

「まったく。このお嬢さんは何を言い出すんだか。いつも驚かされる君には」

笑いの収まらないそのセリフに急に心配になる。やっぱり私の独りよがりな思い込みだったの？

「これじゃ言うセリフが反対だな」

と、チュツとおでこにキスをされる。

一瞬、何が起こったのか理解できずに芝崎さんの顔にじっと見入ってしまう。

少し照れたようなそれでも真剣な眼差しが私を映していた。

私を抱く腕にギツユと力がこもる。

初めて触れた彼の唇は、ただ温かった――。

第18話 【鼓動】

蒼い、蒼い闇。

どこまでも続く、果てのない闇の迷宮。ラビリンス

走っても、走っても、辿り着かない迷路……。

私は懸命に走っていた。

息が上がり、心臓がもう限界だと悲鳴を上げても、ただひたすら走っていた。

振り帰れば、立ち止まれば、その闇に飲み込まれてもう二度とは逃げ出せない。

まるでそう、よもつひらさか黄泉平坂を逃げまどう伊邪那岐命いざなぎのみことのように――。

追っているのは誰？

追われているのはなぜ？

「藍、おいで」

懐かしい声に振り返る。

「先生！」

柏木浩介。大好きな大好きな、優しい、お父さんのような人。

「さあ、迎えに来たよ。一緒に帰ろう」

懐かしい、優しい笑顔が私を呼んでいる。

「お前が必要になったんだ」

——えっ？

「藍。おまえが必要なんだ」

行けない。先生、私、行けない。

声が出ない。

「お前は、その為に、生まれて来たのだから」

大切な人がいるの！

叫んでいるのに。

「お前が来なければ、『彼女』は、死んでしまう」

嫌！

叫んでいるのに。

「シンデシマウ」

「いやああっ!!」

「藍!？」

ここは、何処？

「藍!」

あなたは、誰？

「大丈夫か？」

心配そうな瞳が覗き込む。

「あ…芝崎さ……。ごめ…大…丈夫。怖い夢を見て……」

涙が溢れ出す。

「藍？」

身体の震えが、止まらない。

「うつあつ……っ……」

後から、後から溢れ出す涙が止まらない。

優しい腕が、ふわりと私を包み込む。

「大丈夫。大丈夫だ」

まるで、呪文のように繰り返す言葉。

「何も、怖いことなんかない」

ギュッと抱きしめてくれる、暖かい胸から聞こえる、心臓の鼓動。

「大丈夫」

怖いのは、連れ戻される事じゃない。

死ぬ事でもない。

本当に怖いのは

あなたに知られること。

私は何なのか、芝崎さん。あなたに知られることが一番怖い……。

第19話 【モーニング・コーヒー】

この頃、夢見が悪い。

今までも、泣きながら目が覚めることはしばしばあった。
でも、昨夜のように自分の悲鳴で目が覚めると言うのは、さすがに初めてだった。

ふう――。

一つ溜息をつくとは私は、目覚めの悪さに少しうんざりしながら、セミダブルのベットに半身を起こした。枕元の時計は午前七時。もう、起きても良い時間だ。

畳に敷いた布団に寝ている芝崎さんの様子を、ベットの上からそっと覗き見る。

もともと低血圧気味の上、昨夜私が中途半端な時間に起こしてしまったからか、まだ良く寝入っている。

その寝顔は、童顔がますます少年めいて見えて思わず口の端が上がる。

私がベットで、芝崎さんが畳に布団敷。

最初は、私が布団で寝ますって言ったのだけど、『夜中や明け方仕事に行くこともあるから、この方が都合がいい』との主張に負けってしまった。

実際、そう言う事が頻繁だったこともある。

一週間の泊まり込みの仕事のときだったか、『一人じゃ心配だから、大家さんの所へ行ってるかい?』と言われたことがあったけど、私は断った。

大家さんの所に泊まるのが嫌なのじゃなくて、この部屋で芝崎さんを待っていたいから。

ふう。と、又一つ溜息がもれる。

もう、限界が来ていた――。

自分の心を偽り続ける限界。

彼を偽り続ける限界。

なら。

「よし!」

私は兼ねてから考えていたことを行動に移すべく、一つノビをして起き出した。

「おはよう。今日は一体何のイベントだい?」

キッチンでお弁当を作っていると、いつもながらの寝ぼけ眼の芝

崎さんが顔を出した。

堅めのもとと癖のある髪が、寝癖でますます凄いことになっている。

「おはよう！ 今日はお仕事お休みって言ってたでしょ？ だから、連れて行って貰いたい所があるの」

なるべく元気に見えるように、明るい声で言う。

「うん？」

「動物園。私、一度本物のパンダ、見てみたかったの」 そう言つて笑顔を作る。

いつもは、芝崎さんが誘ってくれても「人混みが、苦手なの」と理由を付けて、極力外出しないでいた。買い物も近所のコンビニかスーパーで済ませてしまうので、私の行動範囲は限られている。

それは、ひとえに『彼ら』に見つかりたくなかったから。でも…

「だめ？」

でも。もういい。

「いいや。そうか。パンダか。上野だな」

私は、決心していた。

「あのさ……」

お弁当を詰める私の顔を覗き込むと、芝崎さんがためらいがちに口を開いた。

「はい？」

真っ直ぐなその視線に一瞬、心の中を覗かれたような気がして、ドキリとする。

彼は意外と、人の心の動きに敏感な所があつて、私が沈んだ気持ちでいたりすると何気なくフォローしてくれたりする。

それはたぶん、彼の生い立ちに起因しているのだと思う。

「……コーヒー頂戴」

「はい」

私は極上の笑顔で返事を返した。

第20話 【動物園】

「パンダって……」

「うん？」

「大きいよね……。ちょっと、山の中で会っちゃったら、怖いかも……」

上の動物園、パンダ舎の前。

四月に入って初めて天候に恵まれたこともあって、平日とはいえ、かなりの数の家族連れやカップルで賑わっていた。

ぬいぐるみのようなイメージを抱いていた私は、パンダのその大きさに驚いて、呆然と呟いてしまった。

確かに、カラーリングは『可愛いパンダ』のイメージそのままだけど、このサイズは反則だと思う。絶対、可愛いと言う許容量を超えている。

ジャイアント・パンダの名前は伊達じゃなかったのね。

しみじみ感心している私を、芝崎さんは愉快そうに見ている。

「パンダってよく見ると、なかなかいい面構えしてるんだ。ほら、目のトコ、模様はたれ目だけど目自体はけっこうスルドイだろう？」

彼の言葉によくよく観察してみると、『じろり』と送ってくるパ
ンダの視線は……確かに、抜け目ない野生の熊そのもので、ちよっ
と焦った。

「本当……」

二人で顔を見合わせてクスクス笑う。

私にとっては、初めての動物園だった。

絵本やビデオで見たことはあっても、実物を目にしたのは初めて
だった。

私がそう言うのと芝崎さんはちょっと考えて、「まあ、俺も似たよ
うなものかな。親が生きてた時何度か来たような気がするけど……」
と、ぼそりと呟いた。

記憶を辿るように目を細めて言うその表情は、淡々としている。

芝崎さんが、両親や事故のこと、自分の生い立ちのことを語るこ
とはほとんどなかった。

「〴〵両親の事、覚えてる？」

「いや。実は、あまり良く覚えてない。普通の人達だったような気
がするけどね……」

「そう……」

たぶんそれは、私が踏み込んで良いことではない。そんな気がした。

「うえーん！ ママー！」

えっ？

突然わきあがった子供の泣き声に、二人で顔を見合わせる。

ツン——と、ワインピースを引つ張られた気がして視線を落とすと、小さな男の子が裾の方を握りしめて泣いていた。

ライオンの帽子をかぶった、五・六歳くらいのやんちゃそうな男の子。

完熟したリンゴのような真つ赤に上気した頬には、大粒の涙がポロポロと、こぼれ落ちている。

「ど、どうしたの？ ボク？」

驚いた私は、しゃがみ込んでその子の顔を覗き込んだ。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔をハンカチで拭ってあげると、ママのことを思い出してしまったのかますます泣きじゃくる。

わ。どうしよう？ 小さい子供の扱いなんて分からない。

どうしたら良いか分からずにあたふたしていると、『よっ』と芝崎さんが、男の子を肩車した。

とたんに、ピタリと止む男の子の泣き声。

「良く見えるだろう？ ママが見えたら教えてくれるかい？」

芝崎さんがいつもの、『100%ウェルカム』な笑顔で語りかける。

最初はキョトンとしていたその子も、肩車から見える風景が新鮮だったのか「うん！ 教えてあげるよ！」と楽しい笑顔を浮かべた。

思わずつられて、私も笑顔になる。

「ちょっと、一回りして来るよ。母親も探しているだろうから。見付からない時は、迷子センターに寄って来る。疲れただろう？ このベンチで休んでて」

「はい」

肩車のまま遠ざかって行く二人の姿は、まるで子煩悩な父親と幼い子供のように見えた。

子煩悩な父親と幼い子供――。

それは、来ることのない未来の理想像。

決して私には叶えられない未来。

『もしも、私が普通の女の子だったら、それは叶えられるのだろうか』

か？」

もしも――。

そんな仮定のことを考えても、現実は何も変わらない。

私は『大沼 藍』でしかなく、他の誰かになれる訳じゃない。

「ホント、私ってばかだ……」

あの時、モデルを引き受けなければ良かったのだろうか？

あの人を、好きにならなければ良かったのだろうか？

思わず仰ぎ見た四月の澄んだ空を背景に、淡いピンクの桜の花が
儚げに咲き誇っていた。

その日の帰り、私は一組のレターセットを買った。

その白い封筒と便箋には向日葵が描かれていて、初めて会った時
に芝崎さんが見せてくれた、あの美しい優しい風景写真を思い起こ
させた。

「向日葵が好きかい？」

じつと向日葵の絵に見入っていた私の耳に、彼の穏やかな声が届
く。

「ええ。大好き。向日葵って、いつも太陽を見詰めて『凜』と立っているでしょう？ あの強さに憧れるの……」

「今度、そうだな。夏になったら『向日葵牧場』に行ってみようか？ 一面の向日葵畑が見られるよ。ほら、初めて会ったとき見せた向日葵畑の写真の場所」

この笑顔を忘れないでいよう。

「ええ。楽しみ……」

終わりの日は、もうすぐそこまで来ていた――。

第21話 【指輪】

「今日は、早く帰って来るよ。誕生日だろう？ たぶん七時くらいには帰れるから、ごちそうをヨロシク！」

そう言って仕事に出掛ける芝崎さんを、私はいつものように笑顔で見送った。

私は今日で十八歳になった。

誕生日――。

去年までは、柏木先生とお姉ちゃん、前田さん、そして私。四人で、豪華ではないけれど心のこもった楽しいバースデー・パーティーをしていた。

今までは前田さんが作るケーキや料理を手伝うだけで、自分一人で準備をすることはなかったけど、でも大丈夫。きっと上手くできる。

「えっと……まずはお掃除をして。それから、大家さんの所でオーブンを借りて……」

まずはデコレーションケーキを作ろう。

大家さんの所のオーブンを借りて、スポンジ台を焼いて。生クリームでデコレーションして……。

じわりと目頭が熱くなって涙がこぼれ落ちそうになるのを、私はギュッと唇をかんで堪えた。

めそめそしていたって、ただ時間が無駄に過ぎていくだけ。

もう一日。

もう一日だけ、あの笑顔を見ていたい。

だから、泣いていたらダメだ――。

私はぐいつと顔を上げて、今日の一番最初の予定。掃除と洗濯に取りかかった。

「へえー、すごいな。このケーキも自分で焼いたの？」

予定通り七時過ぎに帰ってきた芝崎さんは、コタツの天板の上に所狭しと並んだ料理を見るなり、驚いたように声を上げた。

小さな黒い天板の上には、張り切ってデコレーションしたバース・デイ・ケーキを中心に、鶏の唐揚げ、ポテトとマカロニのサラダ、彼の好きな肉じゃが、蓮のきんぴら、豆腐のハンバーグが、賑やかに並んでいる。

キッチンには、まだ並びきらない料理が待機していた。

芝崎さんは、それを感じたように眺めている。

「大家さんの所でオーブンを借りたの。二個焼いて、一個お裾分けして来たわ」

冷やしてあったコンビニのワインを用意しながら、私は笑う。

「喜んでたろう？ あの人、甘い物に目がないから」

『ますます栄養満タンになっちゃうわね』と、嬉しそうにケーキを受け取ってくれた大家さんのホクホク顔を思い出して、思わずクスリと笑いが漏れた。

「藍ちゃん。ちょっと、こっちに座って」

食器の後片付けをしていた私に、コタツから芝崎さんが手招きをした。

いつもと違う硬い表情に、ドキリと鼓動が早くなる。

——私。態度、変だったのかな？

「はい？」

小さなコタツを挟んで向かいあって座る。

「どうしたの？ コーヒー、おかわり？」

平静を装って返事を待つ私に芝崎さんは、上着のジャンパーのポケットから、何か手の中に隠れるくらいの小さな箱を取り出した。

トン——。

とテーブルの上に置かれたのは、小さなグレーの指輪ケース——。

『それ』を、私は信じられない思いで見つめた。

芝崎さんは一つ、大きく深呼吸をして話を切り出した。

「これ、プレゼントなんだけど、受け取って貰えるか？」

パチンとケースの蓋を開けて、私の方に向ける。

中には、小さなダイヤのついたプラチナの指輪が、キラキラと輝いていた。

男の人が指輪をどんなときに恋人に送るのか、そのくらいは私でも知っている。

私たちは半年、一緒に生活している。『同棲』と言えるだろう。でも、その関係はあくまで同居人。家出人とその保護者な関係だった。

『好きだ』と言ってくれたのはつい二ヶ月くらい前のことで、キスをしたのだってその時が最初で最後。

だから一足飛びに『指輪』の贈り物を貰うなんて、夢にも思わなかった。

私は驚きのあまり、芝崎さんと指輪を交互に見比べた。

——単なる誕生祝いのプレゼントなの？

——それとも、特別な意味があるの？

その意図を量れず言葉が出ない私に、意を決したように芝崎さんがゆっくりと口を開いた。

「今すぐじゃなくてもいい——」

そこまで言うと、自らを鼓舞するように大きくまた一つ深呼吸をする。

「藍ちゃんが、そうしてもいいって気持ちになったら、俺と結婚して貰えるか？」

真剣な眼差しが、私を真っ直ぐ見詰めていた。

「まあ、知っての通りの貧乏所帯で申し訳ないけど……」

と照れたように頭をぽりぽりかく。

——反則だ。

こんなのずるいよ。どうしてこんな日にそんなことを言うの？

堪えきれずに、涙があふれ出した。

それは頬を伝い落ちて、膝の上でギュッと握りしめていた手の甲を濡らして行く。

「……ありがとう」

何とか声を絞り出すと、それ以上涙がこぼれてしまわないように、私はぎゅっと目をつぶった。

第22話 【夢一夜】

なぜ、人を好きになるんだろう？

『好き』と言うこの気持ちは、どこから来るんだろう？

お姉ちゃんが好き。柏木先生が好き。前田さんが好き。

そのどれとも違う『あなたが好き』。

芝崎さんが、左手の薬指にはめてくれた指輪に付いているダイヤモンドが、部屋の明かりに照らされて、キラキラと宝石特有の輝きを放っている。

ガラスともクリスタルとも違う、初めて見るその輝きに目を奪われながら、私はずっと聞いて見たかったことを質問してみた。

「芝崎さんは、私のどこが好きなんですか？」

「うん？ そうだな……」

腕組みをして眉間にシワを寄せて『うーむ』と考え込んだ彼の様子に、だんだん心配になってくる。

——そんなに考え込まないと、分からないことなんだ……。

真剣に悩んでいると彼は、『天然なところ』と悪戯小僧のような笑顔浮かべた。

天然って……。そんなの、好きになる理由になるんだろうか？

「うそうそ、冗談だよ。本当は、若いところ」

「……芝崎さん、私をからかって遊んでませんか？」

「うん。遊んでる」

「もう、いいです」

ニコニコと楽しそうな顔を見ていたら、不意に涙がこぼれそうになって、私は拗ねたふりをした。

指輪をケースに戻して、途中だったキッチンの後片づけをしようと、コタツから立ち上がる。

「きやつ？」

キッチンに行こうと歩き出した途端、『ふわり』と身体が宙に浮いて、私は小さな悲鳴を上げた。

一瞬、何が起こったのか分からなくて身体が固まる。上げた視線の先にはさっきまでとは違う、芝崎さんの真剣な眼差し。

そこで私はやっと、自分が抱き上げられていることに気が付いた。

「人を好きになるのに、理由はいらないよ。好きだから好きなんだ」

ね？ と覗き込む瞳が近すぎて、どう反応していいのかわからない。

「あ、あの……、芝崎さん？」

「拓郎」

「はい？」

「もういい加減に『芝崎さん』は卒業してもいいと思うんだけど？」

「拓郎……さん？」

「さんは余計」

「拓郎？」

「合格。俺もこれからは『藍ちゃん』じゃなくって、『藍』って呼ぶことにするよ」

『これから——』

それは、叶わない夢だと分かっているけど……。

「拓郎」

「何、藍？」

何だか、くすぐつたい。

ただ名前呼び合うだけなのに、二人の距離がぐんと近くなった気がする。

芝崎……、拓郎もそうなのか、少し照れたような表情を浮かべて

いる。

お互い視線を交わしてクスクス笑い合う。

おでこに、右頬に、左頬に。落ちてくるキスの雨がやがて唇に届く。

今夜だけ。今夜一晩だけ。

神様。

夢を見てもいいですか？

触れた唇から唇へ。

絡ませ合った指から指へ。

重ね合った身体から身体へ、思いは溢れ、心を一杯に満たしていく。

あなたが好き。

あなたが好き。

過去も未来も何もいらない。ただ、今ここにある、お互いの温もりだけが存在の全て――。

私は、初めて『人を愛する』ことがどんなことか、分かったような気がした。

明かりの落ちた寝室のベッドの上。

私に腕枕をしたまま安らかな寝息を立てている拓郎の、背中に回した手のひらで、そこに残る大きな傷跡をそつと撫でる。

「ごめん……ね」

私の呟きに、眠っているはずの拓郎の腕にギュつと一瞬力がこもる。

ギュつと一度だけ抱きしめ返して私は、彼を起こさないようにそつとベッドを抜け出した。

着替えをして、キッチンで中途半端になっていた片付けをすませる。

壁掛け時計の示す時間は、午前四時。

今日は仕事で六時起きだって言っていたから、もう二時間もすれば拓郎は起きてくる。

その時、居なくなった私をどう思っただろうか？

怒るのだろうか？

悲しむのだろうか？

動物園に行った帰りに買ってきた、向日葵柄の白い封筒の中には、お揃いの便せんが一枚。極短い拓郎宛のメッセージが書いてある。

『 拓郎へ

短い間だったけれど、本当に楽しかった。

何も聞かずに、一緒にいてくれて、ありがとう。

黙って出て行くこと、許して下さい。

さようなら。

そして、心から、ありがとう。

藍
』

その封筒の中に、昨日貰った指輪を入れる。

もう一度、彼の寝顔を見たい衝動を何とか堪えて、そのままここに来たときに持っていた小さなバックだけを手に持ち、玄関に下りる。

振り返った室内は、あの日、最初に訪れた時そのままで、一瞬、今まであったことが全部夢のような気がした。

「ありがとうございました」

私は、溢れ出しそうな想いを胸に、深々と頭を下げてから玄関のドアを開けた。

四月にしてはシンと冷たい朝の空気が肌を刺す。ドアに封筒の端
っこを挟み込むと慎重に閉めて、鍵を掛け、郵便受けに鍵を落と
し込む。

——もう、これで、本当にお別れ。

私は唇をギュッと噛んで、顔を上げた。

薄闇の街の向こう、そこにある私の生まれ育った場所。

『ひかけせいぶつけんきゅうじょ
日掛生物研究所』

そこに帰るために、きびすを返して歩き出した。

第23話 【逃避】

早朝のコンビニは、暖房が効いていて暖かった。

でも、人気がなくてがらんとした店内はどこかもの悲しくて、若い男の店員さんの『いらっしやいませ』と言う声が虚ろに響いた。

私はぺこりと軽く会釈をして、店内に入っすぐ右奥にある銀行のATMの前へ向かった。バックの中からキャッシュ・カードを取り出しそこに刻印されている名前を確認する。

『かしわぎいっすけ
柏木浩介』

まさかこんな形でこのカードを使うことになるなんて、夢にも思っていなかった。

でも、実際問題として何で移動するにしてもお金は必要だ。緊張で、思わず手が汗ばんだ。

——上手くお金が引き出せるかしら？

ゆつくりと、挿入口にカードを差し込む。

画面に表示される案内に従って操作していくと、拍子抜けするほどあっさりとお金が出金された。

先生が言っていた通り、このカードまでは調べられることはなかったのだろう。

先生が——、先生とお姉ちゃんが、共謀して私を逃がしてくれたことは、たぶんばれていないのだ。

そのことに、少しだけほっとする。

引き出したお金で、テレホンカードと少し考えて缶のホットココアを買う。お店の前にある公衆電話から呼んだタクシーは十分くらいですぐに迎えに来た。

「おはようございます!」

『お爺ちゃん』と呼べそうな年齢の優しそうな白髪の運転手さんが、元気に声を掛けてくる。

「おはようございます」

「どちらまで行けますか?」

「豊島区まで……。池袋の『日掛グループ本社ビル』までお願いします」

ゆっくりと動き出すタクシー。

——さようなら。

私は、バックミラー越しに遠ざかる見慣れた風景に、最後の別れを告げた。

目的地、日掛の本社ビルの前に到着したころ、ようやく空が白み始めた。

四月とは言え、夜明け前のこの時間帯はまだまだ冷え込む。

さすがに、十一月のあのころのように吐く息が白くなることはないけど、アスファルトから伝わる冷気に思わずぶるっと身体が震えた。

それが純粹に寒さの為なのか、これから合う人物に対しての恐怖感からなのか、自分でも良く分からない。

私は、ずっとアンカ代わりに手の平で握りしめていたココアの缶を開けて、一口口に含んだ。

猫舌の私にも少しぬるく感じる。

ココアのほわっとした甘さが身体に染み渡った。

そう言えば、芝崎さんに最初におごって貰ったココア、一口しか飲めなかったんだっけ……。

「あ。拓郎から、芝崎さんに戻っちゃった……」

クスリと力のない笑いがこみ上げてくる。

これは、逃げだ。

私は、拓郎から逃げてる。

拓郎に、全てを知られることから逃げている。

あの置き手紙を見付けて、あなたはきつとたくさん傷付くだろう。プロポーズをした次の日に、初めて恋人と言える関係になった次の日に、理由も告げずに姿を消した私のしたことは、謝ってすむようなことじゃない。

それが分かっているても、全てを打ち明ける勇気を私は持てなかつ

た。

「ごめん……ね」

届く筈のない贖罪の言葉を呟くうちに、涙が溢れそうになって空を仰いだ。その視線の先には、薄紫に霞む朝もやの中に巨大なビルがそびえ立っていた。

地上六十階。都会のビル群の中にあっても、まるで堅牢な要塞のようにその圧倒的な威圧感を放つこのビルは、日掛グループの本社ビル。

『株式会社HIKAKE』を筆頭に、その子会社や関連企業、銀行やホテル、果てはレジャー施設まで入っている巨大な複合都市施設でもある。

この王国を一代で築き上げ、そのトップに君臨する伝説の企業家。

日掛グループ・会長『ひかけんいちろう日掛源一郎』。

私の、血統上の祖父――。

私は、その人に会うためにここに来たのだ。

第24話 【お祖父様】

その人を初めて見たのは、八歳の時。

ちょうど今ぐらいの季節で、研究所の中庭の桜の木が一斉にピンクの花を咲かせていた頃だった。

定期的にお姉ちゃんに会い来る『お祖父様^{じい}』。

とても優しい人で、いつも沢山のプレゼントを持って来るのだと、楽しそうな面会の様子をお姉ちゃんから聞く度に、私は心の中で密かに思っていた。

——どうして、私には会いに来てくれないの？

幼心に、なぜ自分には誰も会いに来てくれないのか、不思議だった。そしてそのことが寂くてたまらなかった。

面会は大抵『応接室』で行われていた。そこは私たちの居住空間からは大分離れていて、なおかつ近付く事を厳しく禁止されていたので、そこで何が行われているのか、私が知ることはできなかった。だから自然と、お姉ちゃんの口から聞くことになった。

「今日はお祖父様が来ているの。藍ちゃんもお祖父様のこと見てみたいでしょ？ だからね……」

その日、これからお祖父様との面会があると言う直前、研究所の廊下でお姉ちゃんが最高の悪戯を思い付いたように、満面の笑みを浮かべて言った。黒目がちな大きな瞳が、春の日差しを浴びてキラキラと輝いている。

お姉ちゃんは、周りに人が居ないのを確認してから、更に私の耳

元に口を寄せて『こしょこしょ』と声を潜めた。

「お祖父様はいつも帰りは、屋上のヘリ・ポートに向かうの。ちょうどほら、ここから屋上への階段が良く見えるでしょ？」

指さす先に視線を走らせる。中庭を挟んだ別棟。そこには確かに、お姉ちゃんの言う通り屋上に続く階段が見えた。

「え……。でも、先生に叱られないかな？」

実際、先生に叱られるのが怖い訳じゃない。先生は決して私が恐怖を覚えるような叱り方はしない。私が怖いのは、研究所の所員達だった。

研究所の所員でも極かぎられた人間しか、私たちの住んでいる『こちら側』に来ることはない。でもその所員達は皆決まって、同じような目で私を見た。

冷たい、侮蔑を込めた目。

まるでそう、彼らが扱う実験動物を見るのと同じ目。

だから私は彼らを見掛けると、見つからないように必死になって姿を隠そうとした。でも、限られた居住空間ではさほど功を奏^{そう}していたとは言えず、決まって彼らのその視線にさらされる事になった。

何かを言われる訳じゃない。でも、その視線が、たまらなく怖かった。

私の極端に人見知りな性格は、こうした環境によって形作られたんだと思う。私の世界は、柏木先生と世話係の前田さん、そしてお

姉ちゃん、それが全てだったのだ。

「大丈夫！ 見るだけなもの。ね。ここで見ていてね！」

お姉ちゃんにニコニコとオペラグラスを渡され、それでも私はまだ迷っていた。『お祖父様』を見てみたい。でも、怖い。そんな感情が心の中でせめぎ合っていた。

呼びに来た柏木先生かしわぎに連れられて、お姉ちゃんが『応接室』に向かう後ろ姿を、私はいつもの寂しさや、羨ましさだけではなく、複雑な気持ちで見送った。

見るだけ。

見るだけなら、いいよね？

私は、待った。オペラグラスを握りしめ、ただひたすら『お祖父様』の姿が見えるのをじっと待っていた。

「藍ちゃん、何をしているの？」

不意に後ろから声を掛けられて、思わずびくりと飛び上がる。おずおずと振り返ると、世話係の前田さんがいつもの優しい笑顔を浮かべて立っていた。

ほっとした反面、なんて言い訳をしようかせわしく考えを巡らせる。後ろ手に隠したオペラグラスを握る手に、じわりと汗がにじみ出した。

「あ、あの。桜、桜の花が、綺麗だなあって思って……」

「ああ。そうね、ちょうど満開ね。後で一枝頂いて来ましようね。もう少ししたらおやつにするから、遊戯室にいらつしやい」

前田さんの姿が視界から消えるのを確認して、慌てて視線を別棟に向ける。

別棟の屋上に続く階段を、数人の人影が歩いていった。白衣を着ているのは、柏木先生だとすぐに分かった。そして、グレーのスーツを着た数人の大人に混じって、頭一つ身長の低い和装の人影が見えた。

——あ。お祖父様だ！

震える手で、オペラグラスを目に当てる。

白髪の、優しいそんな笑顔を浮かべた老人が、お姉ちゃんと手をつないで何かを話しながら歩いて行くのが見えた。

ドキリと、鼓動が高鳴った。

その姿を見た瞬間感じたのは、言いようのない『懐かしさ』。
もちろん
勿論会った事も、見たこともない。なのに何故か私はその人を『懐かしい』と感じた。

その懐かしさの訳を知るのは、それから九年後の十一月。

私が、自分が何なのか。

何故、研究所で生活しているのか。

真実を知ったその時だった。

第25話 【全ての始まり】

十一月の寒い夜。

私は『コンコン』と、誰かがドアをノックする音で目を覚ました。

ベットの枕元にある目覚まし時計に目を凝らしてみると、午前二時。真夜中だ。

一瞬、夢でも見たのかと、まだ眠気の覚めない頭でボウッと考えていると、『コンコンコン』と、今度ははっきりとドアを叩く音が聞こえた。

誰だろう？

こんな真夜中に誰かが部屋を訪ねて来るなんて、今まで一度もなかった。

小刻みに忙しくせわ響くノック音に一抹の不安を覚えながらも、私はベットを下りてドアの方に向かった。さすがにこの季節の夜の気温は低くて、ヒヤリとした冷気が背筋を撫でる。

「……誰、ですか？」

扉越しに声を掛ける。

考えられる選択肢としては、お姉ちゃんか前田さん。それか、柏木先生。それくらいしか思い付かない。

「私だ。柏木だ」

「柏木先生！？」

一番意外な人の声に、私は驚いてドアを開けた。

そこには、真夜中なのに、いつものように白衣を着込んでいる柏木先生が立っていた。

「今すぐ着替えて、一緒に来てくれ。寒いから上にこのコートを着て」

「え？」

いきなり茶色いコートを渡さて、何がなんだか分からずに、コートを抱えたまま先生の顔を見上げた。

いつもとは違う少し緊張気味のその表情に、言いようのない不安感がわき上がってくる。

「どうしたんですか？」

「急いで、表で待っているから」

「え、あ、はい」

有無を言わせぬ雰囲気の柏木先生の態度に、ますます不安感が大きくなっていく。

どうしたんだろう？

お姉ちゃんの具合でも悪くなったのだろうか？

お姉ちゃんは生まれ付き体が弱くて、特に寒い季節になると具合が悪くなって伏せがちになることが多かった。

でも、昨日はとても調子が良さそうだったのに……。

着替え終わった私は、研究所内にあるメディカル・ルームへ先生に連れられて来た。

二十畳ほどのメディカル・ルームには、沢山の医療機器が揃えられていて、部屋の奥の窓際に大きな家具調のベットが置かれている。そのベットの背にもたれるようにして、お姉ちゃんが座っていた。色白の顔が、いつもにも増して白い——ううん、青白かった。

その余りの生気の無さに、背筋にゾクリと悪寒が走る。

「お姉ちゃん!？」

思わずベットサイドに駆け寄る。

私の姿を眺めて、お姉ちゃんがニコリと嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「ああ。そのコート、良く似合うわね。良かった」

「全然よくないよ! どうしたの? 具合悪いの?」

「大丈夫、たいしたこと無いの。いつもの軽い発作だから。それにもう、収まったしね」

私を見詰める、大きな黒目がちの瞳が微妙に揺れている。私にはそれが、何かをためらっているように見えた。

お姉ちゃんの視線が、私の隣に立っている柏木先生にゆっくりと

移っていく。

「先生。お願いします。藍に、本当の事を教えてあげて下さい」

「本当に、いいんだね？」

「はい。お願いします」

微笑みを浮かべるお姉ちゃんに柏木先生は一つ長い溜息で答える
と、私の方を向いた。

その目は、今まで見たことがないくらい厳しいもので、私は心の
奥底で、何かが震えるのを感じていた。

『本当のこと』

たぶんそれは、今まで私がずっとどこかで感じていた漠然とした
疑問や、不安感。

その全てへの答えだと、そんな確信めいた物があつた――。

第26話 【真実】

「えっ？ 先生、今何て……？」

私は、思わず驚きの声を上げた。

深夜のメディカル・ルーム。

シンと静まりかえった室内には、医療機器の発する小さな機動音だけが、微かに響いている。

エアコンデションされた室内は、熱くも寒くもないはずだった。なのに、先生の言葉を聞いたとたん、私の背筋には確かに言いようのない悪寒が走った。

「藍^{あい} お前は、彼女、日掛藍^{ひかけあい}の臓器移植の為に造られたクローン体だと、そう言ったんだ」

私を真つ直ぐに見詰め、もう一度さつきと同じ説明をする先生の目は、嘘を言っではない。そんなことは分かっている。

でも、言っていることの余りの突飛さに、脳細胞が付いて行かない。

臓器移植。

クローン。

それぞれの単語の意味は分かる。

クローン羊が成功したと言うニュースも見たことがある。

でも、自分がお姉ちゃん『日掛藍』のクローン体で、それも『臓器移植の為に造られた人間』だと言うことがどうしても信じられない。

い。

先生は、ベットの横に椅子を一つ持つてくると私に座るように促して、自分は椅子に座った私の目線に合わせるように屈み込んだ。一瞬だけ、迷いを打ち消すかのようにギュッと目を瞑ったけど、再び開けたその目に迷いの影は見えなかった。

「十八年前、当時の日掛グループ社長の日掛源一郎ひかけんいちろうの一人息子、裕一郎ゆういちろうの妻が妊娠した時、その胎児に先天性の内臓疾患が見つかった――。

その子供は長い不妊治療の末やっと授かった子供で、もしその子が無事に生まれなければ、今後子を望むことは難しかった。

日掛源一郎はその人脈と財力を使い、世界最高水準の医療施設を作り上げた。それが、ここ、日掛生物研究所だ――。

表向きは、日掛のバイオ部門の一研究施設だが、実際は”日掛藍”一人の為に作られた医療施設だ。そこで、十八年前に行われたのが、臓器移植を目的としたその胎児のクローニングなのだ。それは、他人の臓器を移植するより、安全で確実だからだ……。

”大沼藍”は、この世界の何処にも存在していない人間だ。だから、もちろん戸籍もない――」

衝撃。そう正に衝撃を受けた。

心臓がこれでもかと言うように早鐘を打つ。私は息をするのも忘れて椅子に座ったまま金縛りにあったように固まった。

「そんなの、うそ……でしょう?」

やっとのことで絞り出した声が、どうしようもなく震える。背筋はゾクゾクと冷たいのに、ギュッと握り込んだ手のひらだけが妙に汗ばんだ。

私は先生から視線を外し、お姉ちゃんに助けを求めてその瞳を覗き込んだ。私の視線を真っ直ぐと見返すお姉ちゃんの瞳には、何か揺るぎない信念のようなものが伺えた。

これは嘘でも、冗談でもない。

そう私の本能が告げていた。

この話が真実ならば、私の今まで感じていた疑問の答えは、全て導き出される。

なぜ、私はこの『日掛生物研究所』で生活しているのか。

なぜ、私には『お祖父様』は会いに来てくれないのか。

なぜ、私とお姉ちゃんはそっくりなのか。

なぜ、研究所の所員は『実験動物』を見るような冷たい目で私を見るのか。

それは、私が『実験動物』に他ならなかったからだ。

「藍、信じられないかもしれないけど、理解して。時間がないの」

「時間………？」

「そう。こんな真夜中にわざわざあなたを呼びだしてこの話をしたのは、時間がないからなの。……昨夜お祖父様から連絡があって、臓器移植手術を急ぐように連絡があったの」

「えっ？」

「あなたから臓器を取り出すように、指示がでたのよ」

お姉ちゃんのその声が どこか遠くに感じた。

第27話 【脱出】

「逃げなさい。研究所から逃げるの」

緊張気味のお姉ちゃんの声が、混乱した私を更に急^せぎ立てた。

それが嘘じゃないことは肌で感じた。でも、いきなり逃げると言われても、どうして良いのか分からない。

私は、ベットサイドの椅子に座ったまま、膝の上でギュっと握りしめた自分の手の甲に、ぼんやりと視線を落とした。

確かに、外の世界に憧れていた。

『お出かけ』するお姉ちゃんの姿を、何度羨ましさで見送ったことか。

でもそれは、あくまで戻ってくる『自分の居場所』があつたからだ。いきなりポンと放り出されて、この研究所から離れてどうやって生きて行けば良いの？

私は、何も言葉に出来ずにただ混乱した頭で、グルグルとそんなことを考えていた。

「藍、しっかりして！ あなた、死にたいの！？ このまま研究^{けん}所にいれば間違いなくあなたは死んでしまう……。臓器を取り出されて、殺されてしまうのよ！？」

珍しく苛立つたような声が聞こえて、私ははっと顔を上げてお姉ちゃんの方を見た。

お姉ちゃんの顔の色が、ますます白みを増している。白い白い、青白い顔。真つ黒な長い豊かな髪が余計にその白さを際だたせてい

る。

そこに死の影が垣間見えたような気がして、ゾクリと背筋に悪寒が走った。

「興奮してはダメだ。発作は収まったが、まだ安心は出来ない。落ち着いて。落ち着くんだ」

いつもの穏やかなトーンの柏木先生の声。

柏木先生が、お姉ちゃんの手の脈を取るのを目で追っているうちに、私はやっと少し落ち着いてきた。

「分かったわね？ 今から研究所^ニを出るのよ？」

「でも……」

「でも、なに？」

「私がいなくなったら、お姉ちゃんはどうなるの？」

臓器移植が必要な人が、それが出来なくなったらどうなるのか。専門知識の無い私にもそれは想像が付いた。

お姉ちゃんが死ぬ――。

そんなの考えるだけでも嫌だった。

「私の臓器を移植すれば、お姉ちゃんは元気になるんでしょう？」

手術は確かに怖いけど、お姉ちゃんが死なないで済むなら臓器提供をするのは嫌じゃない。腎臓とか肝臓とか骨髓とか、血縁者からの移植は普通にあるじゃない？ それこそ、わたしはクローンなん

だから、拒絶反応は起こらないだろう。

「藍——、一番移植が必要な臓器は『心臓』なんだ。だから、ドナーになった人間は生きては行けない。だからこそ、日掛源一郎は非合法的なこの研究をさせたんだ」

私の甘い考えをうち砕く様な柏木先生の声が、静まりかえった広いメディカルルームに響いた。

『心臓』——いくら何でも心臓を取り出されたら、生きていけない。私はそこで初めて、お姉ちゃんが『脱げる』と言う意味が分かった。

「藍。私のことは心配しないで。私には世界一優秀な外科医の先生がついているんですもの。ね、先生？」

お姉ちゃん言葉に、ベットサイドに立つ先生が穏やかな微笑みを浮かべる。

「そう言うことだ。彼女のことは私に任せなさい。秘密裏に、移植可能な正規のドナーも探しているし、いざというときの研究も完成しつつある。それに……」

先生は、ベットの端っこに腰掛けるといたわるようにお姉ちゃんの肩に腕を回し、チュツとお姉ちゃんの白い頬に、キスをした。

え！？

今の、何！？ ほっぺに『チュ』って！？ え！？

ええええええっ！？

「彼女は、私にとっても大切な女性だからむざむざ死なせるような真似は絶対にしない。安心しなさい。有り難いことに『所長』なんて絶妙なポストにいることだしね」

半ばパニック状態の私とは対象に、いつもと同じ極冷静な声音の先生の顔には、悪戯いたずら小僧のような笑みが浮かんでいた。

「し……らなかった。私、全然知らなかったよ。ずるい、二人して黙っているなんてずるいよ！」

私のセリフに、お姉ちゃんと柏木先生が顔を見合わせて吹き出した。

私だって、自分の出生の秘密より、二人の關係に驚いてる自分の神経構造を疑う。でも、驚いたんだから仕方がない。

「藍、こっちへ来て」

お姉ちゃんの声に、私は椅子から立ち上がって、柏木先生と入れ替わりにベットサイドに腰を下ろした。その私の肩に、お姉ちゃんが腕を回してきた。華奢な——と言うにはあまりにも細い腕。

こんなに細かったんだ……。

私は、その腕の哀しい感触に、改めてお姉ちゃんの病状の深刻さを感じた。

「藍。あなたは、私の大切な妹よ。何処にいても、何をしていてもそれは絶対に変わらないわ」

ね？ と覗き込む真つ黒な瞳はとても穏やかだ。その瞳を見詰めているうちに、今までの楽しい思い出が一気に脳裏に浮かんでは消えた。

ちょっと、気が強いけど、優しくて面倒見が良い大好きなお姉ちゃん。もう、二度と会えなくなるかもしれない……。

鼻の奥がツンと熱くなって、私は唇を噛んだ。泣いたらダメだ。

「私……」

「うん？」

「お姉ちゃんが大好きよ」

『私もよ』と、ギュッと抱きしめてくれたその優しい感触を、私は絶対忘れない。忘れちゃいけない。

そう心に誓った。

そして、その夜。私は日掛生物研究所を逃げ出したのだ。

第28話 【対面】

すっかり明るくなったビル街に、足早に先を急ぐ人たちが群をなして流れていく。

私はビルの前で、HIKAKE本社の受付が開くのを待っていた。

午前九時。

シャッターの開いたビルの正面入り口から、吹き抜けになっている玄関ロビーを受付に向かって真っ直ぐに歩いていく。

私に気付いた受付嬢が、一瞬不思議そうな表情を浮かべてすぐに「おはようございます」と、営業スマイルを向けてくる。私は、背筋をしゃんと伸ばして声が上擦らないようにゆっくりと発音した。

「日掛源一郎さんにお会いしたいので、お取り次ぎ下さい」

今度は、明らかに不審気な表情を隠そうともせず、受付嬢は「失礼ですが、アポイントメントはございますか？」と質問してきた。

その反応は無理もないと思う。

天下の『HIKAKEの会長』に、朝一で飛び込んできた得体の知れない女の子が、いきなり会わせてくれと言っているのだから。

「アポイントはありません」

「……では、申し訳ございませんが、お取り次ぎは……」

「おい、君っ！ その人を、お通しして！」

不意に慌てたような大きな声が、頭上から落ちてきて、思わずびっくりと飛び上がりそうになる。

声の聞こえた方に視線を上げると、中二階の階段を慌てて下りてくるグレーの背広を着た中年の男の人が見えた。

背の高い痩せぎすの、メガネを掛けた神経質そうな風貌。

——あ、あの人！

私は、その人に見覚えがあった。

早足で階段を下りてきたその人は、ニコリと幾分引きつった笑いを向けると「さあ、こちらにどうぞ」と私の右手首をがっちり掴んだ。

込められた力の強さに微かな痛みが走る。

「あの、岡崎さん、こちらの方は？」

その様子を啞然として見ていた受付嬢が、私の手首を掴んでいる男の人、岡崎さんに不思議そうに問いかける。

「この人は、大事なお客様なんだ、心配ない。私が案内するから、君たちは仕事を続けて」

「あ、はい。会長秘書の岡崎さんがそう仰るなら……」

——会長秘書。そうか、この人『お祖父様』の秘書なんだ……。

初めて『お祖父様』を研究所で見た日も、この人は取り巻きの中にいた。メガネを掛けていたのは柏木先生とこの人だけだから、妙に印象に残っている。その後、何度か盗み見た『お祖父様』の傍らには必ずこの人がいたのだ。

同じメガネを掛けた顔でも柏木先生の目はいつも穏やかで優しうただけど、この人はどこか神経質で冷たそうな印象が強い。

受付からグイグイと無言で私の手を引いて行く岡崎秘書の横顔は、やはり神経質そうで冷たい。思わずひるみそうになる心を奮い立たせる。

秘書に会ったくらいでこんなにドキドキしていたらダメだ。

私が本当に会いたいのは、あの人。

日掛源一郎、私をこの世に作り出した人なのだから。

一階からエレベーターに乗せられ、最上階の六十階で下りる。そのまま広い廊下を、突き当たりの木製の大きな扉の前まで無言で手を引かれていく。

「会長、連れてきました」

ノックの後、岡崎秘書の掛けた声に数瞬の間をおいて、すぐに答えが返った来た。

「入れ」

幾分掠れた様な、張りのある、低い声。その声を聞いた瞬間、鼓動が跳ね上がる。

「失礼します」

力チャリ――。

開かれたドアの向こうに、見覚えのある老人の姿が見えた。

第29話 【別れ】

岡崎秘書の監視下のもと、緊張の極致で足を踏み入れた室内は、趣味の良い重厚なダークブラウンの家具で統一されていて、正面の壁一面が大きな一枚ガラスになっていた。

そこには、霞むような都会のくすんだ青空が広がっている。

眼下の街並みが、精巧なジオラマのように見えた。

足下の分厚い絨毯が足音を全部吸収してしまう。私は、心と同じおぼつかない足取りで歩いていく。

窓際に、私たちを正面に見据えるように置かれている立派な木製のデスク。その、座り心地の良さそうな革張りの椅子に深々と座っている和装の老人――。

それは、紛れもなく『お祖父様』、ひかけんいちろう日掛源一郎その人だ。

無言で私に向けられる表情からは、何も読みとれない。

ただ、その鋭い視線は、決して好意的なものじゃないことだけは、私にも分かった。

聞かなくちゃだめだ――。

そのために、私はここに來たのだから。

私は、尻込みしそうになる心に言い聞かせた。

今、このチャンスを逃したら、もう二度とは来ないだろう。

一つ大きく息を吸い込み真っ直ぐ顔を上げて、『お祖父様』に話し掛けようとしたそのとき、お祖父様の方が口を開いた。

「間違いないようだな」

それは私にではなく、私の後ろにピタリと張り付いている岡崎秘書に向けられた言葉だった。

「すぐに研究所に移送しろ。岡崎、お前が責任を持って連れて行くだ。本社のヘリを使って構わん。ガードの人間を連れて行って、二十四時間体制で監視をつけるんだ。くれぐれも不手際が無いようにな」

「はい。かしこまりました」

「^{かしわぎ}柏木に、二度と同じミスは許さんと言っておけ」

「はい。それでは直ちに」

まるで仕事の打ち合わせをするように淡々と話は終わってしまい、私は岡崎秘書に腕を引かれて部屋の外に連れ出されそうになって慌てた。

掴まれた手を振りほどいてお祖父様の近くへ行こうとしたけど、成人男性の力に叶うはずがない。

「私、どうしてもお聞きしたいことがあるんです!」

上体だけを振り向けて声を上げた。

行かせまいとする岡崎秘書の手にギュッと力がこもり、鈍い痛みが走った。それでも構わず声を上げる。

「お願いです!」

「止めなさい！ 君が話を出来るような方じゃ無い」

ダメだ、振りほどけない。ここまで来たのに！

必死の抵抗も虚しく、更に強い力で引きずられて行く。

「岡崎、早く連れて行け」

「お祖父様っ！」

必死に叫ぶ私に向けられたお祖父様の表情が、微かに動いた。

それは、憐れみとも侮蔑とも取れる微妙な表情。

「お前に、お祖父様と呼ばれる筋合いは無い。儂^{わし}の孫は、日掛藍^{ひかけあい}は、この世に一人しかおらん」

その口から紡ぎ出された言葉に、私は固まった――。

「お前は孫娘の為の、ただの臓器保存の器にしか過ぎない。お祖父様などと呼ばれると、虫酸^{むしず}が走るわ」

氷の様なその言葉が、心の奥底をえぐり取っていく。

もしかしたら――。

それがどんなに甘い考えだったか思い知って、私は何も言葉が出なかった。

『お祖父様は、恐ろしい人よ』

私は、そう哀しそうに言ったお姉ちゃんの言葉を、凍り付いた心の奥底で思い出していた。

HIKAKE本社の屋上にあるヘリポートから、三人のガードマンと共に岡崎秘書に連れられて、研究所に向かった。

結局、私はお祖父様に何一つ聞くことが出来なかった。

私の存在理由。それが、臓器移植の為だとは分かっている。それでも、聞いてみたかった。

少しでも、欠片でもいいから、私に対する愛情はありませんかと。

その口から紡がれる言葉で、答えが欲しかった。

今まで臓器移植の命令が下らなかったことに、私は微かな期待を持っていた。それは、ただの期待に終わってしまったけど……。

遠くなっていく都会の街並みに、優しいあの人の笑顔が重なる。

拓郎……。今頃、どうしているだろうか？

我が儘なやつだと、呆れてる？ それとも、怒っている？

ごめんね……。本当に、ごめんなさい。

視界がぐにやりと歪む。頬を伝って行く熱い感触。それはぼたぼ

たと手の甲にしたり落ちた。

第30話 【懐かしい家族】

「藍！」

ヘリコプターのプロペラが作り出す逆巻くような風に煽られ、私の目の前で、漆黒の綺麗な髪がサラサラと舞い踊っていた。

その黒髪を持ち主の心配そうな瞳が、真っ直ぐ私を見詰めている。傍らに寄り添うように佇んでいる、懐かしい白衣姿の先生が視界に入る。

ああ。私は、帰ってきたんだ。

それは、不思議な安堵感。

私のこの感覚は少し可笑しいのかも知れない。でもここは紛れもなく『私の生まれ育った家』で、お姉ちゃんと先生は私にとって大切な『家族』だった――。

「お姉……ちゃん。柏木先生……！」

懐かしい白い笑顔。相変わらず顔色は冴えないけど、元気そうなお姉ちゃんの姿を見て、思わず膝の力がガクンと抜けてしまう。そのまま崩れそうになるのを、両腕を掴んでいるガードマンに辛うじて支えられる。

お姉ちゃんは無言でつかつかと歩み寄ると、ガードマンの手をギリッと掴んだ。

「放しなさい。何処にも逃げやしないわ。ここまで来て拘束する必要はないでしょう?」

それは、ガードマンに向けられた言葉ではなく、先頭を歩いていった岡崎秘書に向けられたものだ。

「お嬢様。会長命令です。例えお嬢様の言われる事でも、お聞きする事は出来ません。お分かりですね?」

お姉ちゃんの強い視線を受けても岡崎秘書の表情は動じず、淡々とした事務的な口調でそう言い放った。

それは半ば、柏木先生に向けられた言葉でもあった。

「柏木所長に、会長からの伝言です。クローン体は今後『装置』の中で管理するように。本社から連れてきたガードマンを二十四時間配備します」

そこまで言うとう岡崎秘書は一端言葉を切った。少し声のトーンを落として再び口を開く。

「『二度と同じミスは許さない』との事です。意味は、お分かりですな?」

お姉ちゃんに対するのとは違う鋭い岡崎秘書の言葉に、柏木先生が静かに頷いた。

「承知致しましたと、お伝え下さい」

先生の懐かしい声を聞きながら、私の意識は暗い闇の中へ落ちて

行つた――。

「藍。藍――」

自分を呼ぶ優しい声に導かれて、次に私が目を覚ましたのは、見たことも無い部屋の中だった。

冷たい金属で塗り固められたようなその部屋は二十畳ほどの広さで、部屋の中央に、二メートル位の円筒形の水槽の様なものが置かれている。水槽の周りは、精密機器で埋め尽くされている。

その水槽の前に置かれた可動式のベツトの上に、私は横たえられていた。

「私……？」

どうしたんだっけ？　へりで研究所の屋上に着いて、お姉ちゃんと先生に会って……。

「少し、熱が出ているけど、大丈夫。心配ないわ」

そこは研究所の地下五階にある部屋で、水槽のようなものは岡崎秘書が言っていた『装置』、正式には『生態低温維持装置』と言うのだと、柏木先生が教えてくれた。

あの水槽に特殊な蒼い液体を満たし、生体を低温で眠らせた状態で維持するのだそうだ。

生体――。

それが自分だと言うことが実感出来ない。

ただ、多分一度眠りについたらもう目覚める事はないのだろうと言う気はしていた。

先生もお姉ちゃんもそのことには触れようとしなから、私も覚えて聞かない。

「思ったより元気そうで良かったわ……」

熱を確かめるように、お姉ちゃんが腕を伸ばして私の額にそっと手を乗せた。

柔らかい、暖かい感触。

その温もりを感じた瞬間に、私は心の緊張の糸がプツンと音を立って切れるのを聞いた気がした。こらえていた物が一気に溢れ出す。

あの時、離れていく東京の街並みをへりの窓から見下ろしながら流した涙で、もう最後だと思っていた。きっともう涙は枯れて出ないだろうと思ったのに、不思議と、また後から後から止めどなく溢れてくる。

「わ……たし、私、ね。大好きな人ができたの」

頬を伝い落ちる涙を手の甲でグイッと拭くと私は、ゆっくりと今まで自分に起きたことを思い出しながら、長い話を始めた。

寒い、凍えるような港の公園。

「十才も年上なのにそうは全然見えなくて、まるで少年の様に屈

託無く笑う人でね。何だか、テレビの子供番組のお兄さんみたいで……」

思い出して、思わずクスリと笑いが込み上げる。

運命に引き寄せられるように出会った、あの人。

それが、優しい悪魔の気まぐれだったのか、意地悪な神様の悪戯だったのかは分からない。

でも、私にとっては、奇跡にのような出会いだった事には変わらない。

もし、あの時、拓郎に出会っていなければ、たぶん私は生きてはいない。

今まで生きてはこれなかっただろう。

「何も聞かずに、ずっと一緒にいてくれた……。優しい人なの。強くて優しい……。信じられる？私、その人と一緒に暮らしていたのよ？」

しゃくり上げながら泣き笑いする私の長い話を、お姉ちゃんは「うん。うん」と相づちを打ちながら、最後まで聞いてくれた。

そして私は、泣き疲れた小さな子供のように、その装置の中で眠りについた。

本来ならずと、その中で管理されていたはずの『生態低温維持装置』の中、恐らくは、二度と目覚める事のない永い眠りに……。『

第31話 【夢・うつつ】

蒼い、淡い光に満たされた不思議な空間に、私はたゆたっていた――。

波のように、寄せては返す優しいリフレイン。

痛みも苦しみも無い、まるで母の胎内のようなその暖かさに包まれて、私は長い長い夢を見ていた。

夢……？

みんな、夢だったのだろうか。

もう一人の、自分の分身。

幼い時からずっと一緒だった、大好きなお姉ちゃん。

優しい、お母さんのような人。

優しい、お父さんのような人。

そして……。

大好きな、大好きな、あなた。

あの、冬の公園で出会った事も。

あの、美しい優しい写真の風景も。

あの微笑みも。

不安な夜は、ギュツと抱きしめてくれた、暖かい胸から伝わる鼓動も……。

みんな、夢？

それでも、いい。夢でも。

夢でもいいから、あなたに会いたい。

拓郎……、あなたに会いたい……。

不意に、誰かの手が頬に触れた。

そつとそつと触れる、優しい手。

「藍——」

誰かが私を呼んでる。

「藍」

夢……？ まだ夢の続きを見ているの？

夢か現か分からないまま、私の意識は蒼い世界から白いまばゆい光の中へと引き寄せられた。余りの眩さに、目に映るものが何なのか判然としない。

「う……ん……」

声が上手く出ない。まるで声帯が麻痺してしまったかのように、口から漏れるのは荒い呼吸音だけだった。

『ああ、そうか——。きつと移植手術が始まるんだ』

私は、自分がベットの上に横たえられているのを感じて、そう思った。どうせなら、あの幸せな夢の中で消えてしまえたら良かったのに。神様はやっぱり意地悪だ。そう思った時、誰かが私の左手をギュツと握った。

その暖かい懐かしいような感触に、急激に体の感覚が戻ってくる。ようやく像を結びだした私の瞳に映ったのは、会いたくてたまらなかった人の顔だった。

少し固めの癖のある黒い髪。少年の様な真っ直ぐな瞳。その瞳が、心配そうに私を見詰めている。

えっ！？

「拓……ろ？ ど……して？」

まだろれつの回らない口で、私は必死に声を絞り出した。

どうして、拓郎がここにいるの？ まだ、夢を見ているの？

私には拓郎がここに、日掛生物研究所にいる事が理解出来なかった。

彼にはこのことは一切話していない。と言うよりむしろ話せなかった。その彼が今目の前にいて、自分を心配気に見詰めている。

「私が呼んだのよ。あなたを連れて行ってもらう為にね」

不意に降ってきたお姉ちゃんの声に視線だけを巡らせると、拓郎すぐ右隣に立っているお姉ちゃんの姿が見えた。その顔には何故か、悪戯っ子のような微笑みが浮かんでいる。

「え……？　で、も、手術……は？」

混乱して訳が分からない私の言葉を引たくるように、お姉ちゃんはきっぱりと言った。

「ばかね。移植手術なんてするわけじゃないの。言ったでしょ、私は大丈夫だって。何故戻って来たりしたの？　せつかく、自由になれたのに」

少し怒ってみせる、お姉ちゃんの表情は優しい。

「おかげで、変な時にお祖父様は来ちゃうし、こっちの計画がめちゃくちゃよ、もう！」

と、腰に手を当て『プン！』と頬をふくらませた。

「計………画？」

「そう、とっておきの計画！」

そう言つとお姉ちゃんは、綺麗なウィンクを一つ。そして、満面の笑みを浮かべた。

第32話 【覚醒】

「私がむぎむぎと何もせずに、死んだりする訳ないでしょう？ 私を誰だと思っているの。あの、日掛源一郎ひかけげんいちろうの孫娘なのよ？」

そう言ってお姉ちゃん、私のオリジナル体である日掛藍ひかけあいは、惚れ惚れするような鮮やかなウイंकをして見せた。

私は、覚醒した地下五階のあの蒼い部屋から、今はお姉ちゃんがいつも使っている一階のメディカル・ルームに移されている。扉の向こうには、屈強なガードマンが二人、私が逃げ出さないように見張っていた。

あの告白の夜、お姉ちゃんと柏木先生から、私の出生の秘密を教えられたあの部屋――。

落ち着いた上品な調度品、まるでホテルのスイートルームのようなこの部屋は、まるで時間が止まってしまっているみたいに、全てがあの日のままだった。

違っているのは、あの日とは私たちの位置関係が入れ替わっていることで、私がベットの背にもたれて座り、お姉ちゃんがベットのサイドの椅子に座っていること。

枕元に置いてあるデジタル時計には、20:00の文字が表示されている。

遮光カーテンがきっちり引かれているので、窓から外の様子は見えないけれど、夜の闇に包まれていることは確かだ。

二十畳の広いメディカル・ルームには今、私とお姉ちゃんの二人

だけ。

微かな医療機器の奏でる機動音が、静かな部屋の中に優しく響いていた。

芝崎さ……拓郎は、柏木先生に呼ばれて柏木先生の部屋に行ってしまった、ここにはいない。

完全な覚醒をしていなかったこともあるけど、何より拓郎が研究所に居ることの驚きのあまり、私は拓郎とロクに言葉を交わしていない。

正直、怖かった。

たぶん今、拓郎は柏木先生から全てを知らされているのだろう。

私が、クローン体であること。

戸籍の無いこと。

この世に存在しない人間だと言うこと。

それを知った拓郎が私をどう思うのか？

それは、想像するだけで言いようのない恐怖心をかき立てる。

それを知るのが怖かったから、私は逃げ出したのだから。

「心配？」

ベットの背にもたれながら、黙り込んでしまった私の顔を覗き込んで、お姉ちゃんがクスリと笑い声を漏らした。

その黒い大きな瞳は、深く澄んだ色合いをしていて、思わず吸い込まれそうになる。

相変わらず白いその顔は、半年前とは少し違うように見えた。

それは、美しい女の人の顔――。

そう私が言うと、お姉ちゃんは『あなたもそうよ』と笑った。

「私……、拓郎に酷いことをしたの。プロポーズをされた翌日に、黙ってアパートから逃げ出してしまった」

「でも、芝崎さんはここまで藍を迎えに来たでしょ？　それは、藍に文句を言ったためじゃないと思うけど？」

文句を、言う？

お姉ちゃんの言葉に、思わず間の抜けた表情になってしまう。

その私の反応を、楽しそうに見詰めながらお姉ちゃんは、言葉を続ける。

「文句を言われた方が、気が楽かも知れないけどね。まあ、後でせいぜい叱られなさい。あなたが彼に心配を掛けたことは間違いないだし、彼にはその権利があると思うわ」

それに――。

「ああ言う、一見優しそうなタイプは、怒らせると怖いわよ？」

人ごとなお姉ちゃんは、何処までも楽しそうだった。

でも、その何の陰りも見られない笑顔の影に、侵しがたい強い決

意があることを、今の私は知っていた。

第33話 【眠り姫】

「私ね、”眠り姫” になる事にしたの」

それは、メデイカル・ルームに移されてすぐ、ベットに横たわる私に向けられたお姉ちゃんのセリフ。まるで、とっておきの悪戯を披露する子供のような笑顔で、サラリとそう言っただけだ。

「眠り……姫？」

私はその言葉の意味が分からずに、ベットサイドの椅子に座っている拓郎と顔を見合わせた。拓郎も私と同じらしく、狐につままれたような顔をしている。

『眠り姫』って、あの『童話の眠り姫』のことだろうか？

呪いで百年の眠りにおちた眠り姫が、百年後に訪れた王子様の接^キ吻^スで目覚める、童話の眠り姫。幼い頃、私たちが大好きだったお伽^{とき}噺^{ばなし}——。

「そう。Sleeping Beauty! ね・む・り姫」

くすくすと笑うお姉ちゃんの前には、いつもの優しい表情の柏木先生が、寄り添うように立っている。

「十年後か五十年後か、それとも、もっと未来か——。いつか医療技術が進んで、この病が治療可能になるその日まで眠りにつくの」

その笑顔には、何の陰りも無い。

「でね、その時誰も知ってる人がいないと寂しいじゃない？　だからね、私、子供を作る事にしたの」

そう言つと、柏木先生に視線を向けて、いたずらっ子のように『ウフフ』と笑う。

「そしてね、いつかその時が来たら子供達に起こして貰うのよ。素敵じゃない？」

お姉ちゃんの卵子はすでに摘出され、冷凍保存されているのだと言う。

【冷凍睡眠】——コールド・スリープ——

それは柏木先生の本来の研究テーマで、半年前、私が研究所から脱出した時には、既に決めていた事だったのだと言う。

すべての準備が整いつつある時に私が自ら研究所に^{こし}戻らなければ、事はこんなに複雑にはならなかったのだ。

ただ、問題が一つ。

それは、コールド・スリープの技術的な問題。

今現在、コールドスリープに入る技術は完成された。でも、その覚醒技術が未完成である事。

医療技術の進歩と、コールドスリープの覚醒技術の完成。この二つが揃わなければ、お姉ちゃんを起こす事は出来ないのだ。

「だからね、私が眠りに就いてしまえば、さすがのお祖父様でもど

うする事もできないの。あなたは、もう自由なのよ、藍」

「でも……」

知識としては理解できた。私がこの数日眠らされていたあの『生体恒温維持装置』。たぶん、あれと似た感じなのだろうと思う。ただ、私は覚醒できる温度だったけれど、お姉ちゃんの場合は文字通り凍ってしまうのだ。

いつ目覚められるか分からない、不確定の未来に望みを繋いでの唯一の選択肢。

うつん。選択肢はあった。

私から、臓器移植をすればいい。

そのために造られたのが私なのだから。

でも、お姉ちゃんはそれを拒否した。

愛する人が、柏木先生がいるのに。もう、二度と生きては会えないかも知れないのに。

私。私なら、どうしたろう？

「大丈夫。心配しないで」

黙り込んでしまった私の手を握り、お姉ちゃんは励ますようにギュッと力を込めた。

「私はきつといつか目覚める。そして元気な体になって、あなた達

に負けなくらい幸せになつてみせるから！」

その真つ直ぐな黒い瞳には、何の迷いも見られない。

凜と美しい笑顔。それは拓郎との出会いの日、彼が見せてくれたあの写真の向日葵の花を彷彿とさせた。

「だからあなたは、彼と幸せになりなさい。いい人じゃないの。さすが我が分身。男を見る目は確かだね！」

そう言つてお姉ちゃんは拓郎の手を取り、私の手にがっしり重ねると、『うんうん』と納得気に微笑んだ。

第34話 【再びの別れ】

拓郎と柏木先生は一時間ほどで、先生の私室からメディカル・ルームに戻ってきた。

和氣藹藹わきあいあいと楽しそうに雑談しながら帰ってきた白衣姿の二人は、妙に波長が合っているみたいで、部屋を出て行く時は緊張気味だった拓郎の顔にも、微かに笑みが浮かんでいる。

柏木先生は普段、私たち以外の人間と対するとき、研究所の職員に『鉄面皮』とあだ名されるくらいのポーカーフェイスなのだけど、その表情は軟らかかった。

二人の明るい表情からは、話の内容が深刻な物だとはとても思えない。

でも私には、二人が何を話し合っていたのか大体の予想がついた。拓郎も柏木先生もその話題に触れないから、私も敢えて聞く事はしなかったけど。

怖くて拓郎に聞けない。

それが本音。

そのすぐ後、先生の指示で私は、元々色素の薄い茶色の頭髪をお姉ちゃんと同じ『黒く』染めた。

理由は、私とお姉ちゃんが入れ替わるため。

メディカルルームに備え付きの洗面台で、染めた髪をドライヤー

で乾かし終えた私は、鏡に写る自分を見て驚いた。

腰まで伸びた、自然なウェーブの掛かった黒髪。
それは、お姉ちゃんのものだ。

「ほう……。さすがに髪の色が同じだと、見分けは付かないだろうな」

髪を黒く染めた私と、お姉ちゃんを見比べて、柏木先生が腕組みしながら妙に感心したように呟いた。メガネの奥の瞳が、愉快そうに細められる。

その言葉に、私とお姉ちゃんは顔を見合わせた。

私は不思議な感覚に囚われた。
目の前にいるのは、自分と寸分違わぬ人間。着ている物も一緒なので一瞬、鏡を見ているような錯覚に陥る。

確かに柏木先生の言う通り、たぶん、他人は見分けは付かないだろうと思う。

それがこの脱出計画の要だった。

私とお姉ちゃんが入れ替わってまず、私と拓郎はこのディカル・ルームから出て、その足で正面から研究所を脱出する。

一時間ほど山道を下りると拓郎の車が置いてある場所にでるので、その車でとにかく県外に逃げて、その間にお姉ちゃんは『ワールド・スリープ』に入る。

順調に行けば、その作業に六時間。

その六時間を逃げ切ることが出来れば、私は自由になれる。

お姉ちゃんが眠りについてしまえば、もう起こすことは出来ない。そうなれば、わたしの利用価値は無くなり、もう追われることもなくなる。

それが、一連の脱出劇の筋書きだった。

拓郎は、何故かガードマンには『新しい麻酔医の先生』と言う事になっているらしい。

拓郎が白衣を着込んでいるが不思議で聞いてみたら、柏木先生からそう答えが返ってきた。

「意外と、似合うだろう？ 少しは賢く見える？」

始めて私に対して口を開いた拓郎は、そう言って愉快そうに笑った。

私の心配を知ってか知らずか、その笑顔には屈託がない。

そう、それは、いつも私に向けられていたあの笑顔と、何も変わらなかった。

何故？

怒ってないの？

その言葉すらも出てこない。

黙り込んでしまった私にお姉ちゃんが、昔良くしたように、手のひらで口元を隠して『こしょこしょ』と内緒話をしてきた。

「え？」

お姉ちゃんの提案に、思わず間の抜けた返事が出てしまい、その様子を見ていた男性陣二人が一樣に不思議そうな表情を浮かべる。

「お、お姉ちゃん……」

「いいから、いいから！ ほら！」

ためらう私の両手を取って、お姉ちゃんはグルグルとまるでダンスを踊るように部屋の中を回り始めた。くるくるくる回る視界に、柏木先生と、拓郎の姿が交互に入ってくる。

だめ。目が回る！

思わずよろけそうになった瞬間、見計らったようにお姉ちゃん両手をパツと放した。

「きゃっ！」

「うわっ！」

遠心力で振り回されて、私はそのまま拓郎に勢いよくぶつかり、拓郎はバランスを崩して私を抱えたまま尻餅をついた。

お姉ちゃんと言えば、白い頬をほんのりと上気させて楽しそうに、柏木先生の顔を覗き込んでいる。柏木先生の眉根が微かに顰^{しか}め

られた。

「ねえ、どっちがどっちだか分かる？」

腰まで伸びた見事な漆黒の髪を揺らしながら、お姉ちゃんが悪戯^{いたづら}つ子の様な瞳で、柏木先生と拓郎に問いかける。

「分からない筈ないだろう！」

綺麗に重なった二人の声が、広いメディカルルームに響き渡った。防音壁になっているから、扉の外で見張っているガードマンには届く心配はないけど、とうの声の主達は同時に驚いた表情になる。

その余りのタイミングの合い具合が面白くて、私とお姉ちゃんが同時に吹き出した。

柏木先生と拓郎がお互いに視線を走らせ苦笑する。

同じ遺伝子を持ち、ほぼ同じ環境で育った私たちは、性格は正反対だ。

気性のはっきりして物怖じしないお姉ちゃん『日掛藍』^{ひかけあい}に対して、人見知りで引っこみじあんの私『大沼藍』^{おおぬまあい}

外見的に同じ私たちが髪を同じ色にしていれば、他人は見分けは付かないだろうけど、きっぱり『見分けが付く』と断言してくれる人間^{ひと}がいる。

それはとても幸せなことで、自分が必要な存在なのだと思わせてくれる。

「さあ、お嬢様方、出発のお時間ですよ」

少しおどけた様に恭しく言う柏木先生の声が、別れの合図。

「私……、お姉ちゃんが大好き」

声が震える。

鼻の奥にツンと熱いものがこみ上げてきて、私は天井を仰いだ。

勝ち気で我が儘に見えるけど、本当は優しい、幼い時からいつも一緒にいた『大好きなお姉ちゃん』。実は自分が、彼女の臓器移植用に作られたクローン体だと知っても、やはりこの姉が大好きだった――。

「私も、あなたにもう一度会えて良かったわ！」

満面の笑みで、お姉ちゃんが答える。

そして私を引き寄せ『ぎゅっ』と抱きしめると、顔をシャンと上げてきつぱりと言った。

「さあ、行きなさい。これでお別れよ。いい？ 幸せになるのよ。誰にも負けないくらい。じゃないと私、おちおち眠ってられないわ！」

黒い瞳が、涙の粒を含んでキラキラと輝く。

その瞳。

その顔。

その声。

その存在の全てを、私は忘れない。

決して、忘れない——。

第35話 【脱出行 - 1】

時間は、午前零時を回っていた。

「用意はいいね？」

メディカル・ルームの木製のドアの前。少し緊張気味の柏木先生の言葉に、私と拓郎は無言でゆっくりと頷いた。

お姉ちゃんと入れ替わって、私は、今からこの部屋を出て行く。いいいよ始まる『脱出行』。その成功に、私の未来が掛かっている。

もし、お姉ちゃんのコード・スリープ完了前に捕まれば、お祖父様の絶対的な力で移植手術が成されるだろう。そうなれば、拓郎にだってどんな危険が及ぶか分からない。

お姉ちゃんの決意を無にしないためにも、私は絶対ここから逃げるんだ。

嫌が応にも、緊張感が高まって行く。

まずは、二十四時間体制で、私を見張るためにこの部屋の前に張り付いている、ガードマン二人をやり過ごさなくてはならない。

研究所の所長である柏木先生も一緒だし、拓郎もいる。

大丈夫。

私は、『日掛藍』。

誰がどこから見ても、完璧にお姉ちゃんに見える……はず。

そう自分に言い聞かせるけど、鼓動のドキドキが止まらない。

今にも口から心臓が飛び出してきそうになって、ギュツと胸を押さえた。押さえた指先が、緊張でスウツと冷たくなって行く。

「大丈夫。上手く行くよ」

優しいトーンの声に、隣に立つ拓郎の顔を仰ぎ見る。

白衣を着込んで、先生の予備用のメガネを掛け『麻醉医になりすました』拓郎は、『ね？』と私を見詰め返した。

その瞳は穏やかで、まるでこれから『そのコンビニにお買い物』に行くように、緊張感が感じられない。むしろ、楽し気にさえ見えた。

「俺って、意外とこう言うの得意なんだ」

「ええっ？」

本当に得意そうな口振りに、思わず拓郎の顔を見直す。

『得意』と言うからには、そう言えるだけの経験をしていないといけない。やってもいないことを得意と言う人間はまずいないと思う。

拓郎は今まで、そんな『危ない橋』を渡ってきたのだろうか？

一緒に暮らしてた時の拓郎からは、そんな様子は微塵も感じられなかった。

知っているつもりで、実は、私が何も知らなかっただけ？

「ほら、時間は幾らでもあるから、積もる話は後でゆっくりしなさい。いいね、ドアを開けるよ？」

柏木先生の声に、はっと我に返る。

そっだ。今は、脱出の成功だけを考えよう。

「が・ん・ばっ・て！」

私の身代わりになるために、部屋の奥のベットで横になっているお姉ちゃんの声に、私は大きく頷き返した。

それを合図に、木製のドアが開かれた。

その瞬間に全身に突き刺さるガードマンの厳しい視線――。
空気がピリピリと張り詰めて行く。

廊下は既に照明が落とされていて、常備灯の小さな明かりだけが足下を照らしている。私達はそこへ、ゆっくりと足を踏み出した。

柏木先生を先頭に続いて私、そして最後が拓郎。ジロリと厳しい視線を向ける二人のガードマンの間を抜けていく。三人の足音が、静まり返った廊下に響き渡った。

余りの緊張に、駆け出したい衝動に駆られてしまう。

――慌てたらダメだ。落ち着いて。

「柏木所長」

不意に掛けられたガードマンの声に、思わずびくりと足が止まる。私は、顔を上げられずに自分の靴のつま先をじっと見詰めた。

「何かな？」

ごく冷静な柏木先生の声が、シンと静まり返った薄暗い廊下に響く。

「岡崎秘書からの伝言です。何時になっても良いから、就寝される前に岡崎さんの部屋の方に顔を出すようにとの事です」

「分かった」

無表情で事務的に岡崎さんの言葉を伝えるガードマンに、柏木先生が更に事務的に返事を返す。

「ああ。部屋の中には実験体しかないから、良く見張っていてくれ。何かあったら、首が飛ぶくらいではすまないのですね」

『首が飛ぶ』との先生の物騒なセリフに、ガードマン達の顔に一瞬人間味のある表情が浮かんた。互いに視線を交わして、神妙に頷く。

第一関門突破！

ガードマンの視界から完璧に外れたとき、私は思わず大きな溜息を付いた。

第36話 【脱出行 - 2】

そう言えばお姉ちゃんは『変な時にお祖父様は来ちゃうし、計画が台無しよ』と言って、プンと怒っていたっけ。

「先生、岡崎さんが今ここにいて事は……」

歩みは止めずに、柏木先生にさっきのガードマンとの遣り取りについて聞いてみる。

「ああ、もちろん『会長』も一緒だ。今回の移植手術は、ご自分の目で確認されるそうだ」

会長――。お祖父様、日掛源一郎がここに来ている。

『お前は孫娘の為の、ただの臓器保存の器にしか過ぎない。お祖父様などと呼ばれると、虫酸が走るわ』

あの時、HIKAKEの本社で始めて対面した時、投げつけられたセリフが甦り、氷の様に冷たい何かが背筋を撫でた。

「心配はいらない。君達は、ここから離れる事だけを考えなさい」

「先生……」

お祖父様は、恐ろしい人だ。

あの対面で、私はお姉ちゃんの言葉の意味を身を持って理解した。あの人は、決して手段を選ぶような人間ではない。

確かにこの計画が成功して、お姉ちゃんがコールド・スリープに入ってしまったら、お祖父様にはもうどうする事も出来ないだろう。私を捕らえてみたところで、移植手術は出来ない。

でも……。

「先生は、どうなるんですか？ 大変な事になるんじゃない……」

今更ながら、その事に気が付いた私は、急に心配になって尋ねた。柏木先生は、私にとってはお父さんのように大切な人だ。もし先生に何かあったら、私はその犠牲を強いた自分を絶対許せないだろう。

そんな気持ちで、幸せになんかなれるはずがない。

納得できないでいる私に、先生は足を止めると昔良くしたように腰を屈め、自分の目線と私の目線の高さを合わせた。

その瞳が優しく細められる。

「私は大丈夫だ。心配はいらない。確かに、会長の怒りを買って何らかの処分は受けるだろう。だが、コールド・スリープの覚醒技術の完成の為には、私は必要な人材だ。だから会長は、私をここから追い出すような理に^{かな}適わない真似はしないよ。あの人は、そう言う計算の出来る人間だ」

「でも、先生……」

その『何らかの処分』が心配なんですけど。

私の心を見透かすように、先生は口元をほころばした。

「藍、お前は私にとって大事な家族だ。実の娘のように思っているよ。私にも一つくらい、父親らしい事をさせてくれないか？」

そう言う先生は、私の頭を『くしゃくしゃっ』とかき回した。その時だった。

カッン、カッン――。

背後から近付いてくる靴音に、私達は一斉に振り返った。その視線の先には、薄暗い常備灯の明かりに照らされ浮かび上がる、背の高い痩せぎすの男性のシルエット。

見た事があるような、無いような、多分知っているはずなのに思いつけない。

デジャ・ビュ――。

私は既視感を覚えながら、その男性が近付いてくるのを固唾かたすを呑んで見守った。

「柏木所長」

近付いてくる影の主が、男の人にしては少しトーンの高い抑揚の無い声で、柏木先生と呼ぶ。

神経質そうなこの声――。

私はその声に聞き覚えがあった。

そう。あれは、HIKAKEの本社に行った時に聞いた声。

「あ、ヤバイかも」

隣で、拓郎が焦ったようにボソリと呟く。

「あれ、会長秘書の岡崎さんですよ。柏木さん俺、藍を捜しに取材を装ってHIKAKE本社に行った時、彼に合ってるんです。俺が偽医者だと気付かれるかも……」

囁くように、早口で耳打ちする拓郎のセリフに、先生が微かに眉根を寄せた。

「分かった。彼は私が引き止めるから、君たちは手はず通りに行きなさい。慌てずにゆっくりと。いいね」

「はい」

拓郎は先生に返事をして、さり気なく私の背中を押した。そのまま私と拓郎は、研究所の出口へ向かい歩き出す。

「岡崎さん、今から部屋に伺う所でした。どうかされましたか？」

「手術の日程の件で、確認が……」

先生達の会話を背中越しに聞きながら、ゆっくりと確実に、二人から遠ざかって行く。あそこの角を曲がれば、岡崎さんの視界からは完全に外れる。そうすれば、比較的外に出るのは容易なはず。

上手く行く。そう思った時だった。

「あ、藍お嬢さん。少しお話があります。夜遅くに済みませんが、お時間を頂けますか？」

突然掛けられた岡崎さんの声に、私と拓郎はギクリと固まった。
みんなの足が止まり、全ての音が消える。嫌な沈黙が暗い廊下に
更に暗い影を落とす。

「藍、お嬢さん？」

岡崎さんの声は淡々としていて、計画がばれた訳ではなさそうだった。

でも、拓郎は岡崎さんに顔を知られているし、そもそも、私がお
姉ちゃんと入れ替わっているのがバレないとも限らない。

うつん。話をしたら、きっとバレてしまうだろう。

「は、はい……」

答える声が、微かに震えてしまう。

事態が悪い方へと流れを変えたのを、感じずにはいらなかった。

第37話 【脱出行 - 3】

「岡崎さん、お嬢さんは予備検査で大分疲れています。急ぎの用でなければ、明日にして貰えませんか？」

「はい」と返事はしたものの、岡崎さんに近付いて行く事も出来ずに、突っ立て躊躇^{ためら}うこと数十秒。柏木先生がすかさず助け船を出してくれた。

「そうですか……。分かりました。お嬢さん、明日の朝食後伺います。宜しいですね？」

岡崎さんの声はやはり神経質そうで、予定がずれる事が不本意だと言うニュアンスを含んでいたけど、そんな事はこの際無視させて貰う。

「はい。分かりました」

返事と共に作った笑顔が、思わずヒクヒクと引きつる。

お姉ちゃんと私の声質は基本的には一緒だけど、私の方がトーンが低い。極力話をしない方が無難だ。

「そう言う事だから君、お嬢さんを早くお連れして。体調チェックを忘れないように」

それは、柏木先生が拓郎に向けた言葉。

拓郎は「分かりました」と神妙に頷くと、さり気なく私の背中を押した。

良かった……。

何とかバレーずに済みそう。

そう思ったのもつかの間。

「あれ？ 君、どこかで会った事ないか？」

岡崎さんの訝し気に呟く声に、再び私達の足が止まる。

背中の拓郎の手に力が込めるのを感じて、余計にドキドキと鼓動が高鳴った。

「つい最近、研究所以外のどこか……東京か？」

「気のせいじゃないですか？ 私は、あなたに会ったのは初めてですが？ 何分、こちらに来たのも最近なので」

いつもより低い声音で返事を返す拓郎を、岡崎さんは眉根をギョと寄せて見詰めている。その瞳が微かに青白い光を放ったような気がした。

「いや、気のせいじゃないな。私は一度会った人間の顔は忘れないのでね」

嫌な沈黙が落ちる。今、岡崎さんの脳内では、コンピューターのようにデータ検索が行われているに違いない。侮れない。この人は、曲がりなりにも日掛グループ会長の第一秘書なのだから――。

「藍、走るぞ」

ポソリと耳元で呟く拓郎のセリフに私は、頷きで答える。

「そうか、日掛の本社だ。会長の取材に来た雑誌記者、芝崎と言ったか。あれは君だろう?」

カッン――。

靴音が静寂を破って、迫り来る危機を伝える。

驚きと、思い出した事への安堵感と、それらが入り交じったような歪んだ笑みを張り付かせて、岡崎さんが歩いてくる。

「何故ここにいるのだね? 何をしているんだ!??」

だんだんと詰問口調になりながら、つかつかと私達の方に近付いてくる。

だめだ! 拓郎の名前まで覚えている、誤魔化しきれない!

その時、岡崎さんの後ろを追ってきた柏木先生が、ヒョイと、自分の足で岡崎さんの足を払った。

「ぬわっ!??」

言葉にならない声を上げながら、スローモーションで細身の体が空を飛ぶ。

「走れ、藍!」

岡崎さんが私達の足下にスライディングしてくる派手な音と、拓郎の叫び声が綺麗に重なった。

「何をするんだ柏木所長!？」

岡崎さんの怒声が、大音量で響き渡る。

「ああ、申し訳ない。つい蹠^{ひき}跟^りけてしまつて。運動不足ですかね？」

至極落ち着いたトーンの柏木先生のセリフを奪^うい取る勢いで、岡崎さんが喚^{わめ}き立てる。

「何を言っているんだ! まさか、あれはクローン体の方なのか?!? 柏木所長、君は何をしているんだ!?!」

そんな遣り取りを背中に聞いて、私達は文字通り、脱兎のごとく駆けだした。

柏木先生に前もって指示されていた、職員用の通用口から外に出る。

外は、正に闇夜だった。

分厚い曇に覆われた暗い夜空には、月どころか星一つさえ見えな
い。四月にしては冷たい湿気を含んだ空気が、必死で走る体に纏わ
り付く。

はあはあと息が上がる。

自分の鼓動だけしか聞こえない。

中庭の桜の花が満開に咲き誇る中、薄暗い街灯の明かりだけを頼

りに、一目散で出口を目指す。

普段は使われていない西の門。その先は細い山道になっていて、車では追ってこられない。

門を出れば、何とかなる。

「藍、もう少しだ、がんばれ！」

弾む息の下、「はい！」と、私は力強く頭^{かぶり}を振った。

第38話 【脱出行 - 4】

激しく揺れる視界の先で、深い闇に、懐中電灯の小さな明かりが頼りなげに踊る。

その明かりに照らし出された山の木々が、急に強まった冷たい風に煽られて、不気味に枝を揺らしていた。

「きゃっ」

かなり足下が悪い。

何度もこけそうになって、そのたび拓郎に支えられる。極度の緊張と苦しい息の下、繋いだ手から伝わる温もりだけが、唯一の道標みちしるべだった。

この道は、研究所が建つ前からあった古い山道で、今はほとんど使われていない。

幅は二メートルにも満たないだろう、かなり急勾配の下り坂の道には、街灯など立っているわけもなく勿論舗装もされていない。土のままの山道だ。

道の両脇は針葉樹林になっていて、木々が、ぎりぎりまでその太い幹を張り出させて、不気味な陰影を浮かび上がらせている。

まさに『原生林』と呼べそうなくらい、人の手が入っていない自然のままの山林だった。

研究所のメイン道路は、専用の地下道になっていて、一キロほど下の幹線道路に繋がっている。

半年前、私が研究所から逃げ出した時に使ったのもそっちの地下道で、私が西門のこの山道に足を踏み入れたのは初めてだった。

「大丈夫か！？　もう少しだから頑張れっ！」

叱咤^{しった}する拓郎の声に、私は声を出して答えることが出来ずに、ただ頷き返した。

苦しい――。

心臓が、口から飛び出しそうにこれでもかと悲鳴を上げている。酸欠で、こめかみがガンガンと不平を鳴らした。

不意に、そのどれとも違う、突然の違和感が背筋を走り抜ける。

何？、この感じ。

足だ。足が可笑しい。

湧き上がった言いようのない違和感に、思わず眉をひそめる。

膝から下の感覚が可笑しかった。

動いているのかすらよく分からない、まるで麻酔を掛けられた時のような感覚が、足先からじわじわとせり上がってくる。

「うつ……」

急激に強くなって行くその感覚に、思わず呻き声が漏れた。

何？　足が、痺れて……る？

急激な運動の為なんかじゃない。

それは、明らかに私の体が発する異常のサインだった。

「た……くろ、待って、足、おかし……」

そこまで言った時、ガクンと完全に足の力が抜け落ちた。

「ああっ？」

グラリと揺れる視界。世界が、ぐにやりと歪む。
気持ち悪い――。

「藍!？」

バランスを崩して倒れ込みそうになるのを、辛うじて拓郎に支えられる。

何!？

私、どうなっちゃったの!？

「足……おかし、の。全然力、入らな……」

可笑しいのは、足だけじゃない。ろれつもかなり怪しい。

この感覚は、そう丁度、生態低温維持装置から出された直後のあの時に似ている。

でも、なぜ!？

「やっぱり、無理か」

「えっ？」

呟く拓郎のセリフに、何とか顔を上げる。

拓郎は、私のこの症状の原因を知っている？

その真意を聞こうと口を開いたとき、背後がにわかに騒がしくなった。複数の男の人の切迫したような話し声が以外と近くに聞こえた。

その声が、だんだんと近付いてくる。

多分、岡崎秘書の差し向けたガードマンだ。

ダメだ。このままじゃ捕まる。

この状態で捕まったら、拓郎に迷惑がかかってしまう。

今でも、十分に迷惑はかかっているけど、捕まったらどうなるのか想像が付かない。

いくら何でも、命まで取られる事はないだろうけど、誘拐罪とかで警察に逮捕させることくらいは平気でやりそうで怖い。

「拓郎」

お願い、私を置いて逃げて――。

そう、言おうとした時、拓郎がニコリと笑ったような気がした。うつん。確かに笑ってる。

「藍、こっちだ。脇道にそれるぞ？」

「えっ？」

「逃走ルート、その2。心配ない、こんなこともあるかと、柏木さんからちゃんと策を授かってきてるよ。要は、コールド・スリープが完了するまでの六時間、捕まらなければいいんだ」

そう言つと拓郎は、ほとんど私を抱えるようにして、到底道には見えないその『脇道』に足を踏み入れた。

第39話 【脱出行 - 5】

闇。

闇が濃い。

まるで底のない沼のように、抗えば抗うほど私達の体を捉えて離さない、果てのない闇。

もう抜け出せないのでは無いかと思う程の闇が、どこまでも続いていた。

猥雑に絡み合った木々の中を、小さな懐中電灯の小さな光が忙しなく動き回る。

はあはあと言う、自分の荒い呼吸音だけが耳に響く。

力の入らなくなった私の足では思うように進めなかった。私はほとんど拓郎に支えられるようにして歩いていた。

幸い、背後から人の迫る気配は感じない。

最も、忍者みたいに気配を殺して近付かれたら私に分かるはずもないけど、あの岡崎さんやガードマンにそんな芸当は出来るとは思えないから、たぶん、私達が『協道にそれた』事は気付かれていないのだと思う。

「もう少しだ、頑張れ」

拓郎の励ましに、息が上がって声を出すことが出来ずに、私はた
たコクンと頷き返す。

その時、ポツンと、頬に冷たい雫が一つしたたり落ちて、反射的
に天を振り仰いだ。視線の先は暗闇で何も見えない。木々も空も渾
然一体となって、ただ暗い闇色に融けている。

雨の雫は次第に数を増やして、ぱたぱたと葉を叩く音が賑やかさ
を増していく。

むせ返るような土の匂いが立ちこめた。

「降り出したな……急ぐぞ、藍」

「は……い」

ようやく絞り出した声は、まるで風邪を引いたときのようによろめ
ていた。

どれくらい道無き道を歩いただろうか、以外と短い時間なのかも
しれないけど、今の私には何時間にも感じられる。その場所に着い
たときには、二人ともすっかり濡れ鼠ねずみになってしまっていた。

「着いたよ。ここだ」

「ここ……は？」

少し開けた台地に古びた丸太造りの小屋が建っていた。

ログハウスと言うのだろうか。さほど大きくはなく、たぶん、拓郎のアパートの部屋よりは大きい位だと思う。

古びて、木々に埋もれたその小屋には、当たり前だけれど人の気配はない。

鬱蒼と茂る木々に囲まれ打ち捨てられたように佇むその姿は、どこかお化け屋敷のようで、もの悲しさと恐怖心を駆り立てる。

照らすのが、懐中電灯の頼りない光だけと言うもの、嫌が応にもそのおどろおどろしい雰囲気有助長していた。

童話の世界なら、間違いなく魔法使いのおばあさんが住んでいそうだ。

「研究所が建つ以前、使われていたものらしいけど、この山そのものが日掛グループの所有になっているから、日掛の所有の不動産になるのかな？ もっとも、この存在を把握してるのは、柏木さん位だろうけどね」

思わず山小屋に見入ってしまった私に説明する拓郎の声は、どこか楽しそうな響きを持っている。私は、視線を小屋から、すぐ脇にある拓郎の顔に移した。

辛うじて判別できるその顔には、確かに楽しそうな表情が浮かんでいる。

「ん？ 何？ どうした？」

私を抱えるように小屋の入り口まで辿り着いた拓郎は、私のその視線に気付いて首をかしげた。

「どう……して？」

「ん？」

「何だか……、楽しそう、だから」

私の質問に拓郎は、「実際、楽しいから」とクスクスと笑い出した。

山小屋の中は、多少のかび臭さはあるものの、外見からは想像できないくらい綺麗で、生活感があった。最近まで、使われていたのだろうか？

十畳ほどの板張りの部屋には壁際に暖炉が作り付けられていたけど、火をおこしたりすれば追っ手に見付かるリスクが大きくなるので、使うことが出来ない。

さすがに電気は引かれてなく、小屋の中も濃い闇に支配されていた。

雨に濡れた服が肌に張り付いて体温を奪っていく。

そのせいなのか別の原因があるのか、私の体は小刻みに震えていた。相変わらず足の感覚も可笑しいままだ。

もしかしたら、このまま――。

そんな不吉な考えが、胸を過ぎった。

私は、普通の人間ではない。

外見は、普通の人間となんの変わりも無いけれど、あくまで人工的に造られたクローン体だ。その目的は臓器移植にあつて、普通に生きるためではない。

私は、拓郎と生活している間、『クローン』に付いて自分なりに調べてみた。

インターネットでの検索が主なものだったけど、氾濫する情報の中で一番興味を引かれたのは、羊のクローン実験の記事だった。

クローン羊のドリー。

彼女は、普通の羊の半分の寿命で死んでしまった。

通常は十二年は生きる筈の寿命は、六年に満たなかった。

人間と羊は違う。

でも私は、ドリーの辿った道が、そのまま自分の辿る未来図に見えて仕方がなかった。

だとしたら。

もし、長く生きられないのなら、せめて大好きなお姉ちゃんの助けになりたい。

それが、自分がこの世に生を受けた『存在意義』なのじゃないの？

「さあ、ここに座って」

拓郎の声に、私は、はっと我に返った。

第40話 【脱出行 - 6】

私は、小屋の奥、暖炉の前に置かれているソファに、崩れ込むように座り込んだ。

「服、脱いで」

「えっ？」

耳に飛び込んできた拓郎の声に、思わず首を傾げる。

「服、濡れたままだと風邪を引くだろう？」

「え、でも……」

確かに全身濡れ鼠だけど、着替えも無いのに服を脱いだら、余計に風邪を引きそうだと思う。

口籠もる私に拓郎は「心配しないで、準備は万端だから」と、ライターの明かりを頼りに部屋の隅から毛布を抱えてきた。

その毛布は真新しくて清潔そうだ。この古びた小屋には不釣り合いな、新しい毛布。

「ああ、ここはね、柏木さんの『秘密基地』なんだってさ」と、硝子製の小さな灰皿に白いローソクを立てて、火を付ける。

丸太小屋の中に、ローソクの炎が淡い陰影を刻み出した。

「柏木先生の、秘密基地？」

私が疑惑の眼で見詰めている事に気が付いたのだろう。拓郎は、毛布を私に掛けるとクスクス笑い出した。

「そう。まあ、簡単に言えば避難場所かな。研究に行き詰まった時、森を散策していて偶然見付けたんだってさ。たまに、息抜きに来るんだって言うてたよ」

研究に行き詰まって、森を散策？

こんな、山奥に？

「全然、知らなかった……」

私の前の柏木先生は、いつも穏やかで、何でも知っていて、お父さんみたいで――。そんな風に、悩む姿なんて見たことが無かった。

私は、私達は、こんなにも守られていたんだ。

「ほら、脱いだ服貸して。絞って干しておくから」

「あ、はい」

私は、雨を吸ってぐっしりと重くなっているシャツとジーンズを何とか脱いで拓郎に渡すと、そのまますっぽり毛布にくるまった。

拓郎は自分は上着だけを脱いで、絞ってからソファの上に広げた。

「はい、お邪魔しますよ。お嬢さん」

そう言つて、拓郎が毛布の中に入つて来る。そのまま、私は抱え込まれるように抱きしめられた。

温かい。

それはまるで、お日様を浴びているよう。

全身に広がる安堵感。そして、その安堵感と同じ質量の不安感が押し寄せてくる。

「じじ……」

「うん？」

「見付からないかな？」

ここを知っているのが、柏木先生だけなら、多分闇雲に山狩りをしたところでタイム・リミットまでに見付けられる事は無いように思える。

でも、万が一見付かったら、今の私では逃げ切れない。

「見付からないよ。大丈夫、心配ない」

拓郎の言葉に、何の根拠も無いことは分かっている。でも、何だかこうも自信満々に言われると、そんな気がしてくるから不思議だ。

可笑しい。

さっきまでは、『お姉ちゃんの為に研究所に戻った方が良いのか

も』なんて思っていたのに、今はこうして、捕まる事に怯えている。

「俺さ……」

私を抱えたまま、拓郎がボソリと呟いて、言葉を切った。

「え？」

拓郎が耳元で囁く声のトーンは、とても柔らかい。

私は、拓郎が飲み込んだ言葉の意味を探り出そうと、ロウソクの揺れる灯りに照らし出され微妙な陰影を刻む、拓郎の顔を見上げた。

私の視線に、少し目元を緩めると何かを思いだしたように、拓郎はクスリと笑う。

『苦虫をかんだような表情』って、こう言うのを言うのかも知れない。

「いやさ、藍に会ったら絶対本気で怒ろうと思っていたんだ、本当は」

「え!？」

予想外の拓郎のセリフに、私は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

だって再開してから拓郎に怒られた記憶はない……よ？

私の反応が面白くて仕方が無いと言うように、拓郎は、肩を振るわせて笑っている。

「た、拓郎？」

「でも、実際会ったら嬉しくて、そんな計画は何処かにスッ飛んじまった。我ながら、意志薄弱だなんて思ってたさ」

「ごめんなさい……」

私には、それしか言える言葉が見付からない。

あんな形で、出てきた――。

うつん。

理由すら告げずに、拓郎から逃げ出した私には、言い訳する資格も権利もない。

「少し眠った方がいい」

後悔の念で一杯でただ黙り込むしか無い私に、拓郎は穏やかな声を掛けてくる。

「ごめんなさい。」

トクントクンと素肌から伝わる鼓動が、冷えた体を温かく包み込む。

まだ見つけられる可能性はあるのに。

でも、拓郎と一緒にならきつと大丈夫。

そんな確信に満ちた安堵感で、私はそのまま眠りの中に落ちて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813b/>

蒼いラビリンス 【藍Side】

2011年3月29日13時12分発行